



健康塾通信

〒604-8111 京都市中京区
 三条通高倉東入榎屋町57
 京都三条ビル401A
 公益財団法人
 京都健康管理研究会
 理事長 長井苑子
 制作担当 岡本吉朋
 TEL 075-746-2123
 FAX 075-746-2092

2025年
 4月15日発行
 (季刊, 通巻第29号)



泉 孝英記念助成 2025年春

公益財団法人 京都健康管理研究会 理事長 長井苑子

令和2年10月1日に助成機関として船出した当公益財団も5年目を迎えた。泉先生は近現代の医学、医療の領域での先人達の欧米留学の足跡を丁寧に探索し、その流れの中で、日本の医学、医療がどのように展開してきたかを考え抜かれた。自らも、20代半ばで留学するなら一番上質な処へと、米国ロックフェラー研究所、スウェーデンのカロリンスカ研究所を選ばれた。強烈な異文化体験であったことだろう。このインパクトは生涯消えることなく、近現代日本医学の150年(遺作)を出版できずに逝くことを病床で嘆かれていた。泉先生の強い意志を見て育った弟子と歴史家の甥が遺作を出版できたのはまさに僥倖であった。

当財団の助成活動継続は充実してきている。小さな財団であるが応募も多く、評価者としても基本姿勢を維持しながら時代の流れや問題も把握する必要がある。キーワードは難病と臨床研究、異文化体験であるが、このキーワードを全て満たさなくても、新しい技法を導入した研究は、難病の経過のどこかでその成果が活用される可能性がある。新技法の開発は主に理工系の仕事であるが、その開発の必要性を示唆するのは、医師や医学研究者が正確な観察を蓄積した資料を示すことだろう。このような若手研究者を支えたいという想いを引き継いでいる。

目次

[異文化体験]	学会の旅・留学の旅(8) 紹介序論	長井苑子	2
	学会の旅・留学の旅 —私の呼吸器病学—(8) ボルチモア, ミラノ	泉 孝英	3
	チュービンゲン大学での集中治療講習会に参加して	陣上直人	6
	国際学会に参加して知る日本の良さ	吉田常恭	9
	2024年アメリカリウマチ学会の参加記	金下峻也	14
[高齢者と健康]	高齢者への薬物治療 —医薬分業が完璧ではない我が国で薬剤師の役割—	乾 賢一	19
	鹿児島県の高齢者医療・介護事情	蓑輪一文	22
	「生、労、描、志」それぞれの生きざま探訪 (第1回)	下前國弘/長井苑子	25
	京都祇園と豪州シドニーが繋がる話	川本卓史	29
[エッセイ]	90歳になりました	坂本清音	31
	ナラノヤエザクラと知足院	菅沼俊彦	33
	『鳥瞰するキリスト教の歴史』を執筆して	岩城 聡	35
	都市景観のルネサンス —フィレンツェからパリへ	山崎正史	41
	東京探訪記(9) “山の手”の風景②: 赤坂	四元秀毅	47
わが音楽人生 其の5 “アンドレアの囁き”	荒井雅至	49	
青春旅の思い出手帳(5) 僕の青春放浪記再開	岡村邦彦	53	

[異文化体験] 留学・交流
学会の旅・留学の旅(8)
紹介序論

長井苑子

現在、サルコイドーシスや間質性肺炎の臨床を診療所外来で継続している私ではあるが、泉先生の学会の旅の記憶をたどってみても、当時の革新的な方法や試薬を使っただけの簡単な実験成績の発表でも、新しい知見を提出するという点で充実した日々であった。その努力を継続して、同時にその成績が臨床診断、治療、経過のどこに関わる有用性があるのかと常に考えられたのは、泉先生の見通しの良さ、現実感覚の確かさによる支援と、国際レベルでの討議を見聞できるということがあったからである。

1984年のボルチモアへの旅は、国際サルコイドーシス学会が Johns Hopkins 大学で開催されるということで、あの有名な大学構内での興奮も沸きあがったものだ。

私は、主に気管支肺胞洗浄細胞を用いた臨床実験成績の発表の時期であったが、この会ではじめて、学会長の Carol Johnson Jones 教授という年配の有名な臨床家の女性から、学会の席上で、後ろから肩を叩かれて、慈愛に満ちた微笑みを浮かべながらサルコイドーシスの実験から臨床を考えていく過程をゆっくりと味わいなさいと言われたことを鮮明に覚えている。泉先生が「日本、京都という地域の中で世界に発信するにはどのようにすれば意義のある知見がでるのか」をじっくりと考えられていたことも、先生の記載からもわかることである。

1987年のミラノでの国際学会も、歴史あるミラノ大学の構内での学会で、イタリア文化

体験も加わってワクワクしていた。おまけに、サルコイドーシス病変部のマクロファージとリンパ球との免疫



反応に、サルコイドーシスの血液マーカー、アンギオテンシン変換酵素 (ACE) が肺病変部位で酵素としてアンギオテンシン 1 (A-1) をアンギオテンシン 2 (A-2) に分解し、この A-2 がマクロファージ上の A-2 受容体に結合するとマクロファージの抗原提示能を亢進するというプロセスが動き、サルコイドーシスの免疫反応亢進を促進するという新しい仮説を実験的に示せたというデータを発表したのだから、これはきっと若手の学術賞をもらえるのではないかと期待もあった。しかし、デンバーの Lee Newman 先生が、ベリリウム肺での成績をクリアーに発表されて、それが受賞された。Newman 先生は、私の期待感を理解されていたようで、実に迅速にやさしくケアして下さったことも、心に残ることであった。米国に住むユダヤ人の賢い聡明な人格というものを垣間見たと思った。

サルコイドーシスという病気をあれこれ免疫学の視点から仮説をたて、新しい成績を蓄積しながら、欧米の異文化体験、欧米、アジアの研究者、医者との交流など、今から思えば、自由度もゆとりもあっただけに、もっと頑張ってもよかったかなと反省もするが、自分らしさを失わずに継続できたことの幸せも(ある意味限界も)、思い出としては語ることができる。やがてサルコイドーシスの臨床へとシフトしていく前の、異文化体験たっぷりの、経済的には貧しかったが心豊かな時期を経験できて感謝している。

[異文化体験] 留学・交流

学会の旅・留学の旅

—私の呼吸器病学—(8)

ボルチモア, ミラノ

泉 孝英

ボルチモア

第10回国際サルコイドーシス・他の肉芽腫性疾患会議は1984年9月17日から22日まで、ボルチモアのジョンズホプキンス病院呼吸器科の Carol Johnson Johns 教授 (1924~2000) を会長として、ジョンズホプキンス大学医学部構内で開催された。

29カ国から305名が参加してこの学会は、3部構成で行われた。

Part I. Basic Mechanisms of Sarcoidosis

Part II. Other Granulomatous Disorders

Part III. Clinical Studies of Sarcoidosis

病態生理をめぐっては、前回のパリ会議 (1981) におけるクリスタル旋風の後だけに、特に大きな成果、進展は見られなかった。

他の肉芽腫性疾患は実験肉芽腫に関する報告が大部分で、疾患としては過敏性肺臓炎に関する研究報告が行われた程度であった。

臨床研究は発表の半分を占めていた。サルコイドーシスの活動度の指標の総点検と言える会議であった。特に、BAL (気管支肺胞洗浄液) のリンパ球増加 (Hunninghake, 1981)、血清 ACE 高値 (Lieberman, 1974)、GA シンチ (Line, 1981) の3指標である。Turner-Warwick 教授 (英、ブロンプトン病院) によって、“Do Measurement of Bronchoalveolar Lymphocyte, Serum Angiotensin-converting Enzyme, and Gallium Uptake Help the Clinician to Treat Patients with Sarcoidosis” と題したこの問題の要約とも言うべき講演が、Sven Lofgren Memorial Lecture として行われた。WAG (lung

Wash, Ace level, and Gallium uptake) は、活動度の指標になるとの結論であった。

一方、WAGは予後の指標になりうるかの問題点があるが、この問題に関しては、以後の国際会議でも集約された報告は提出されていない。理由としては、長期にわたる予後の追跡調査はいずれの国でも困難なためである。米国のような国では医療費の問題がある。寛解・治癒した患者を予後追跡のために受診させるのは無理である。また、英国、スウェーデンのような国民皆保険の国々では、一定の医療機関を受診させることができない体制であるのでさらに困難である。ボルチモア会議以後、この問題に関して幾つかの報告が行われているが、WAGは予後の指標にはならないとの見解が有力である。私自身、WAGは予後の指標にはならないとの結論を得たが、自験症例には本来予後良好な BHL 単独症例が圧倒的に多く、欧米の症例で肺野病変例が多いのと大きな違いがあり、発表しても誤解・混乱を来すのではないかと懸念から、国外では発表しないままになった。国内では、「お嫁に来たときには良い子でも、その後は良い子とは限らない」とのジョークを飛ばしていたが、四半世紀経過した今日では「お嫁」の言葉はすでに死語である。

この会議、私自身は国際学会の Executive Committee のメンバーに選出されたが、会議を通じて痛感したことは、我が国の臨床研究体制の脆弱さである。ボルチモア会議では、国際会議に発表して、利目されとまでは行かなくとも討論の対象になるような演題は、私を含めて我が国からは皆無であった。ボルチモアからニューヨーク、サンフランシスコ、成田、大阪と UA のディスカウント切符を買っての帰りの長旅の機中で考えたことを記しておきたい。

我々日本人が国際会議に参加することの意

義である。欧米の新しい知識を身につける、あるいは観光・物見遊山に行くのであれば問題はない。しかし、我が国の患者についての臨床研究の成績を発表し、外国の成績と比較して論議することを国際会議参加の1つの目的であるとするならば、我が国から参加することは極めて難しい。難しい事情について考えてみたい。

(1) 我が国の医療機関が体系化されていない。まず、病院は救急医療と入院医療だけ、外来はすべて診療所という欧米では普通のことできていない。診療所と病院の連携がない。診療所から病院に紹介されるのは、がん患者、重症患者、さもなくば医師との人間関係の難しい患者である。サルコイドーシスのような軽症の多い病気の場合、「何の病気だろう」との領域にとどまり、専門医・研究者に紹介されることなく治癒することが多いことになる。

(2) 私の場合、サルコイドーシスを研究するため、1人でも患者を発見するために採った方策は、健康診断機関に出掛けることであった。私だけでなく、多くの教室員が副業として健康診断機関で働いた。年間30症例程度の新患を診ることができた。我が国では断然多い症例数であったが、欧米の施設に比較すると1桁少ない数である。この程度の数では、何か新しい知見が得られても直ちに追試は容易ではなかった。

これはサルコイドーシスに限ったことではない。肺癌の場合、我が国では最近でも1施設年間100の手術例があれば多いほうであるが、1980年欧州サルコイドーシス会議でノビ・サド（ユーゴスラビア）の病院を訪れたとき、肺癌の年間手術数が1,000と聞いて驚いたことがある。また、スウェーデン留学当時（1972年）、腎移植が行われていたのはストックホルムとヨーテボリーの2ヵ所だけで

あった。患者の集中化のできないところが我が国の弱点である。一人一人の研究者は才能と熱意を持っていても、臨床研究ではたちうちできない根本的な欠陥がある。昨今、多数の診療ガイドラインが作成されているが、日本製のエビデンスのなさに困惑していることは以前と同様である。

(3) 我が国ではサルコイドーシスの患者は少ないが、研究者が多いということも問題である。自験症例が少ないとなると、外国の文献を見て発言する、あるいは執筆することになるので、内容に問題が起こる。1975年、京都で胸部疾患学会が開催されたとき、「早期病変である BHL 症例には進展防止のために積極的にステロイド投与を行うべきである」とする東京のサルコイドーシスの権威の先生と、「BHL は自然寛解することが多いのでステロイドは原則、投与すべきではない」とする私の間で大議論となった。この先生はサルコイドーシスを結核と同じように考えて「早期発見・早期治療」を主張されたわけであるが、最後に私が「先生はサルコイドーシスを診ていないから、そう考えるのだ」と発言した後々、不愉快なことを経験したのも今となっては懐かしい思い出である。しかし、この「BHL にステロイドは投与すべきではない」との話を実証して日本語で公表することができたのは1992年、また英文で記載することができたのは昨年（2008年）のことである。サルコイドーシス第1例の経験（1963年）から29年あるいは45年である。臨床研究とはこれほどの年月が必要なことである。悲哀を感じながらのボルチモア会議であったが、楽しいことがなかったわけではない。ボルチモアは1830年、全米で初めて鉄道が開通したボルチモア・オハイオ鉄道の発祥地である。米国最初の蒸気機関車が発車したマウントクレモア・オハイオ鉄道博物館である。16万面の敷地に、かつて

の大陸横断鉄道の蒸気機関車、客車、郵便車が所狭しと並べられていた。世界中の蒸気機関車の中でも最もパワーがあり、全長40m、538 tのアレゲニー号も保存されていた。鉄道少年だった私にはたまらない博物館であった。

ミラノ

第11回世界サルコイドーシス・他の肉芽腫性疾患会議 (World Congress on Sarcoidosis and other Granulomatous Disorders) は1987年9月6～11日、the Ospedale Maggiore Hospital で Carlo Grassi 教授 (Pavia University 呼吸器科) を会長として開催された。実際に会議を企画進行したのは Gianfranco Rizzato 教授 (Niaguarda Hospital, Milan) である。会場は14世紀に構想され、15世紀、建築家 Antonio Filarete によって作られた華麗なルネサンス様の建物であった。

招待講演 (invited lectures) で関心を呼んだのは、Hugh A Fleming (英, Papworth Hospital, Cambridge) の心サルコイドーシスに関する講演で、英国における1971年から86年の間に発見された心臓サルコイドーシス300例、死亡例138例に関する報告で、77例は突然死であり、第7回ニューヨーク会議 (1975) での41例、死亡例32例の岩井の報告を改めて確認した内容であった。Richard A. DeRemee 教授 (米, Mayo Clinic) は、前年 (1986) Mayo Clinic で開催した “International Colloquy on Wegener's Granulomatosis” の成果を踏まえて “Wegener's Granulomatosis, Newer Concepts of Classification and Treatment” と題しての招待講演を行った。ANCA (Van der Found, 1985) 登場の意味は大きいものであった。

Yutaka Hosoda (日, 広島放射線影響研究所) は “Epidemiology of Sarcoidosis” と題した総説講演 (State of the Art) を行った。また、総説講演として Margaret Turner-Warwick 教

授は “Treatment of Sarcoidosis” と題しての講演を行った。サルコイドーシスは基本的には自然寛解の多い疾患であるが、一部には予後不良な症例もあり、ステロイドを使うべきかどうか、いつ投与すべきか、結局は結論のつかない病気であるとのことである。そして、この見解は今日も同様であることは事実である。

ミラノ会議の1つの大きな成果は、WASOG (World Association of Sarcoidosis and other Granulomatous Disorders) の結成である。WASOG 設立の功労者は、Geraint G. James (英, Royal Northern Hospital) と Gianfranco Rizzato である。サルコイドーシスの国際会議としては、1960年ワシントン以来の International Conference 以外に、欧州では European Conference of Sarcoidosis (欧州サルコイドーシス会議) があり、第1回はジュネーブ (1971)、第2回は東ベルリン (1976)、第3回はノビ・サド (1980)、第4回はナポリ (1983)、第5回はウイーン (1896) で開催されていた。

この2つの学会が合併し、WASOG が生まれたわけである。欧州サルコイドーシス会議が開かれるようになったのが東西冷戦 (1946～1990) 下、国際会議に参加しにくい東欧圏内の研究者を意識してのことも1つの理由であった。

開催地は東寄りのことが多かった。ベルリンの壁崩壊はミラノ会議2年後の1989年11月9日のことであるが、このミラノ会議以前の頃から、学会で出会う欧州の先生方と話し合おうと、ベルリンの壁崩壊、東西ドイツの統合 (1990年10月3日) をすでに予想されていた。当時、旅から帰り「東西ドイツも統合は近い」と京大担当の大新聞の記者に話しても、誰も信じてくれなかった思い出がある。

京都大学 名誉教授
(最新医学64巻8号, 2009年8月)

[異文化体験]

チュービンゲン大学での 集中治療講習会に参加して

陣上直人

この度、私はチュービンゲン大学で開催された集中治療に関する講習会に講師として参加してまいりました。以前より、京都大学、チュービンゲン大学、米国のブラウン大学が提携して、このプログラムが開催されてきました。コロナ禍では渡航困難なため一時的に中断していましたが、2023年より再開したため、私は2024年の2月に参加させていただきました。

チュービンゲン

チュービンゲンはドイツ南西に位置する人口9万人弱の街で、フランクフルト空港から高速鉄道で4時間の場所に位置しています。観光都市とは異なり、日本人観光客を見かけることはなく、ガイドブックにも詳細が掲載されない秘境です。ネッカー川を挟んで色とりどりの美しい建物が立ち並び、日常生活の中で異国情緒を感じることができます。

街の中心部には、1078年に創建され1606年に改装されたホーエン・チュービンゲン城があり、今日では古代史博物館として活用されています。駅とチュービンゲン大学の間の高丘の上にあることから街全体を見渡すことができます。チュービンゲン大学も1477年設立と長い歴史があり、ノーベル賞を始め歴史的学者を数多く輩出しています。

認知症疾患であるアルツハイマー病の疾患概念を確立したアロイス・アルツハイマーも1886~1887年にチュービンゲンに学生として



写真1：アロイス・アルツハイマー先生が住んでいたアパートメント



写真2：ボルシェミュージアムの Porsche 959



写真3：夜明けのチュービンゲン

滞在されており、住んでいたアパートメント（写真1）も訪れることができました。当時の様子がそのまま残されていて、現在もチュービンゲンの学生が住んでいます。歴史的

な医師も同様の景色を見て過ごしていた
と思うと感慨深い場所でした。

シュツットガルト

フランクフルトからチュービンゲンに
向かう途中にシュツットガルトがありま
す。週末の休日には観光で訪れました。

シュツットガルトの中心部にはルート
ヴィヒスブルク城という18の建物群と、
450室を超える部屋からなる欧州最大級
のバロック様式の宮殿があり、バロッ
ク・ロココ、そして新古典主義の繁栄を
感じることができます。また、シュツッ
トガルトは自動車工業で有名な都市であ
り、ポルシェミュージアムやメルセデス
ミュージアムがあります。ポルシェミュ
ージアムには初代から最新までのポルシ
ェが展示されていました。雑誌などでし
か見たことがなかった、幼少期に憧れた
959 (写真2) や近代の Carrera GT、918
Spyder なども展示されており、たいへん
興奮しました。

チュービンゲンでの日常

チュービンゲンの街並みは美しいだけだ
なく、諸外国のようにゴミは落ちていま
せんし、ホームレスを見かけない街で
す。チュービンゲン駅の南部には近代
的な建造物も見られますが、街の中心
部は古い建物ばかりで、その中を夜
明けにジョギングするのが日課でした
(写真3)。

やはりドイツのビールはおいしく、アフ
タータイムも楽しみました。チュービ
ンゲンにはネッカーミュラーというビ
アレストランがあり、ネッカー川を眺
めながら過ごすことができます。ヴァ
イスビールとドイツ料理との相性は
抜群でした。



写真4：神経集中治療の講義

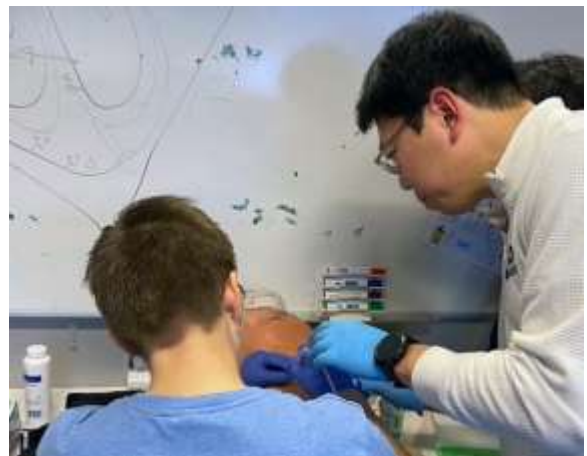


写真5：手技実習の様子

集中治療講習会

さて、メインテーマである講習会ですが、
米国集中治療医学会が主催する集中治療に
関するプログラム (Fundamental Critical Care
Support) です。2週間かけて座学に加えて手
技実習を織り交ぜて学ぶもので、私は脳神経
内科医ということもあり、神経集中治療や脳
神経学的疾患に関する講義を担当しました。

集中治療室でのベッドサイド実習では、重
症患者さんのモニタリングや、身体所見から
患者さんの全身状態を議論しました。実技実
習では人形やご遺体を用いたエコー実習や、
カテーテル留置などの手技的な実習を行いま
した (写真4、5)。



写真6：筆者（向かって左）と同行の石黒義孝先生（中央）、橋川隆ノ介先生（右）

最新のシミュレーターを用いた心肺蘇生実習も充実していました。本邦での医学教育も似たような内容ですが、以前から様々な実技実習が教育に取り入れられているようですので、日本が後追いで諸外国のシステムを取り入れていると感じました。

異文化交流

本プログラム自体は10年以上前から、救急科から医師が派遣され継続されてきたものです。私にもお声を掛けていただくことはありましたが機会には恵まれておりませんでした。このたび、2023年にも参加された石黒義孝先生から、ぜひとも参加をとお声掛けいただき、思い切って一緒に参加してみました。百聞は一見にしかずで、ヨーロッパの文化を肌で感じることができました（写真6）。

医学教育を通して、ヨーロッパの教員・学生と交流し、その土地の文化や考え方を経験しました。同時に日本のアピールもしつつ、今後の交流を発展させていくきっかけにもなりました。

最後になりましたが、今回の渡航への助成金をいただいた公益財団法人京都健康管理研究会様、ご指導いただいたテュービンゲン大学の Reimer Riessen 教授、Martina Veronika Ebi 先生、このような機会を持たせてくださった京都大学医学部附属病院初期診療・救急科の大鶴教授、そしてブラウン大学の南准教授に感謝を申し上げます。

（京都大学医学部附属病院 初期診療・救急科／高気圧酸素治療センター）

〔異文化体験〕

国際学会に参加して 知る日本の良さ

吉田常恭

国際学会への参加

2024年6月12日から15日にかけて、オーストリア・ウィーンで開催された欧州リウマチ学会2024年度総会に、公益財団法人京都健康管理研究会の助成を得て参加しました。ウィーンは日本でいうと北海道の稚内よりも北に位置し、終始涼しく快適に過ごせる国でした。街並みはさすがヨーロッパという趣があり、至る所に彫刻や美術館、教会が並びます（写真1）。市街地の中心にあるシュテファン大聖堂（写真2）から15～20分ほど電車で移動するだけで、ほとんどの観光地を巡ることができ、とてもコンパクトに感じられました。食事いわゆる欧米の「チーズたっぷりの濃厚料理」ではなく、代表的なシュニツェルは日本のヒレカツに似ており、その他のスープやサラダも含め、日本人の舌に合った料理が多く、胃もたれもせず美味しくいただきました。驚いたことに日照時間が長く、21時を過ぎても明るいため、連日、国内外の友人とレストランをはしごすることができました。特にワインはヨーロッパ各国のものが比較的安く提供されており、お土産に購入したものを含めて大変満足しました。

この学会で、私は博士課程の研究課題の一つである「関節リウマチの早期病変である骨炎と骨微細構造変化の発生機序」について口頭発表を行いました。関節リウマチは、早期から骨粗鬆症を合併しやすい疾患として広く知られていますが、実は発症前から骨内で炎



写真1 たまたま入った教会。中では音楽のコンサートが開催され、無料で聴くことが出来た。



写真2 シュテファン大聖堂
長い螺旋階段を上る必要がありますが、右の塔の頂上からの街の風景は絶景でした。

症が先行し、骨粗鬆症が進行することが近年明らかになりつつあります。私は以前から「なぜ関節リウマチが発症するのか」に興味を持ち、その解明の鍵として最も早期に炎症が起こる骨内環境に着目しました。5年間かけて関節リウマチのモデルマウスを用いた実験で、特定の炎症性サイトカインが早期の骨病変で

ある骨炎や骨微細構造変化に関与している可能性を見出しました。

英語でのプレゼンテーションは初めての経験で、non-verbal language の面で欧米人との大きな差を感じる場面もありましたが、幸運にも欧米若手医師団体から Top 10 Abstract Award、本会から Best Abstract Award を受賞し、日本発の研究が国際的に認められる喜びを感じました(写真3)。このような光栄な賞をいただいたのは、ひとえに大阪公立大学の橋本求教授、京都大学免疫・膠原病内科の森信暁雄教授、教室員の皆様、並びに共同研究者の先生方のご指導とご支援のおかげであり、心より深く感謝申し上げます。

国際学会・社会における日本のプレゼンス

日本人は一般的に「シャイで控えめ」と言われますが、スポーツや文化、学術分野での活躍を通じて、こうしたイメージが変わりつつあります。スポーツ界では、例えば野球の大谷選手が打ち立てた歴史的な記録や、サッカー、バレーボールといった国際舞台での日本選手の活躍がその良い例です。このような成功の背景には、日本人特有の素質が大きく寄与しています。技術の徹底した追求、高い忍耐力、卓越した精神力は、長年培われてきた日本文化の一部です。また、謙虚さと礼儀正しさは国際社会においても強く評価されるポイントであり、これらがスポーツだけでなく、他分野でも日本人が信頼され、活躍する理由の一つとなっています。時代の変化に伴い、これらの特質は、現代社会におけますますますグローバルな舞台での強みとして認識されています。さらに、従来の「個人技」や「内向き志向」に加え、近年ではチームワークを重視し、他国の文化や価値観を積極的に取り入れる柔軟性が目立っています。これにより、



写真3 上：欧米若手医師団体からの Top 10 Abstract Award

下：本会からの Best Abstract Award



日本人は「サポート役」だけでなく、プロジェクトや試合の「中心人物」としてリーダーシップを発揮する場面が増えてきました。このような役割の変化は、日本人が国際社会でのプレゼンスを拡大し続ける原動力となっています。

医学・医療界においても、日本人研究者の精密で高品質な研究は世界的に高く評価されています。欧米に引けを取らないどころか、日本独自の視点や徹底的な実験、データ分析が際立ち、国際的な舞台で独自の存在感を示しています。この特質は、リウマチ膠原病領域の研究においても顕著であり、今回の欧州リウマチ学会で再確認できました。

欧州リウマチ学会はリウマチ膠原病領域に

おける2大国際学会の一つであり、2024年度はウィーンに世界132か国から12,871名が集いました。過去最高の5,249件の演題が登録されましたが、採択されたのはその内の1,850件(採択率35.2%)に過ぎず、非常に厳しい競争率でした。そのような中、日本からは222件の演題が登録され、採択されることで、世界第7位という順位を記録しました。

これは、ヨーロッパ主催の国際学会にもかかわらず、数多くの欧米諸国を抑えて日本が高いプレゼンスを示した事を意味しています。この成果は数だけでなく、内容の質の高さにも支えられています。日本人研究者の細部にわたる実験設計や正確なデータ解析、さらに斬新な研究アプローチが、他国からも注目される要因です。特にリウマチ膠原病疾患は、患者の生活の質を大きく左右する疾患であり、その治療法や病態解明が国際的に重要視されています。日本からの研究は、疾患の病態解明や治療の進展に貢献し、グローバルな医学界で高い評価を得ており、これからも、国際的な舞台で影響力を持ち続け、さらに発展することが期待されます。

国際学会に参加するメリット

私が国際学会に参加するようになったのは近年のことです。それまでの参加は国内の学会に限られていましたが、新型コロナウイルス感染症の大流行による制限が緩和されたことを契機に、海外の動向を直接確認したいという思いが強まり、国際学会への参加を始めました。

国際学会への参加は、最新の医学知識や技術を学び、グローバルな視点を養うだけでなく、自分の研究を国際社会に発信し、評価を受ける貴重な機会です。また、多国籍の研究者と直接意見を交換することで、新たな発見

や次なる研究のインスピレーションを得る場でもあります。特に今回の欧州リウマチ学会では、難治であるリウマチ膠原病疾患の「寛解後の治療薬の減薬や中止のタイミング」や「治療抵抗性膠原病における CAR-T 療法」といった最新の研究動向に触れることで、治療の未来について多くの学びを得ました。

近年、病態解明の進展とそれに応じた治療薬の開発が目覚ましく進んでおり、リウマチ膠原病疾患において疾患活動性のコントロールや寛解が可能となってきました。しかし、欧州リウマチ学会はさらにその先を見据え、「免疫抑制薬の中止」を目標に掲げた研究が進められています。このアプローチは、患者の生活の質を向上させるだけでなく、医療費削減にも貢献する可能性があり、非常に興味深いものでした。また、「CAR-T 療法」の進展にも感銘を受けました。この治療法は、SLE(全身性エリテマトーデス)だけでなく、皮膚筋炎や全身性強皮症といった難治性疾患においても実用化が進んでおり、単なる「寛解」を超えた「免疫抑制薬不要の完治」を現実のものとする可能性を秘めています。これらのセッションを通じて、医療の未来が非常に明るいものであることを改めて感じました。

一方で、本学会では学術的な内容に留まらず、参加者がリラックスし、交流を深められるような工夫も数多く見られました。例えば、休憩スペースには特別ステージが設置され、ピアノの生演奏やプロの歌手による歌声を楽しむことができました。これにより、学会の合間にまるでジャズバーにいるような束の間のひと時を過ごすことができました。

さらに、特にユニークだったのは「脱出ゲーム」です。これは、当日集まった各国の8~9人のメンバーがチームを組み、リウマチ学の知識を駆使しながら「上司のオフィス」

から脱出するというものです。ゲームの過程では英語でのコミュニケーションが不可欠で、多国籍チームでの協力が求められました。幸い、我々のチームは見事に脱出を成功させましたが、この経験は学術的な知識だけでなく、異文化交流の重要性やチームワークの大切さを改めて実感させるものでした。

海外から見た日本の良さ

海外の方々と話をすると、「日本の良さ」を改めて実感させられる場面が多々あります。驚くことに、多くの方が日本を訪れた経験を持ち、その際の感動やエピソードを熱心に語ってくれます。こちらが尋ねる前から、日本で訪れた場所や伝統文化、食事、サービスの質などについて、深い思い入れを持って話す姿に触れると、日本人であることへの誇りを感じずにはられません。

特に近年、動画配信サービスの普及により、日本のアニメや映画がリアルタイムで海外でも視聴可能となり、これが日本文化を世界に広める大きな要因となっています。中でもスタジオジブリの作品は非常に高い評価を受けており、その人気は日本国内だけに留まりません。例えば、新しく友人となったスウェーデン人が「一番好きなアニメ作品」として挙げたのが、高畑 勲監督の「おもひでぽろぽろ」でした。この作品は日本では比較的マイナーなジブリ作品とされていますが、海外ではその情緒的なストーリーが「アニメを超えた文学的な作品」として高く評価されています。また、高畑監督の「火垂るの墓」も同様に、国内では兄妹の悲しいエピソードが影響し視聴率が低迷したため、2007年以降は放送されていません。しかし、海外ではその映像美と感動的な物語が評価され、質の高い作品として支持されています。このように、海外の視

点を通じて日本の文化や作品の新たな魅力に気づかされることが多く、非常に感慨深いものがあります。

また、海外に行くことで気づかされる日本の良さも数多くあります。例えば、日本の治安の良さは海外から訪れる人々にとっても非常に印象的なポイントの一つです。日本では日常的に感じる安心感が、海外の人々にとっては特別なものとして受け取られることがあります。同様に、医療や教育、インフラの整備、そしてサービスの質の高さも日本が誇るべき要素です。これらは日本人にとって当たり前のものですが、海外では必ずしも標準的ではありません。そのため、日本を訪れた人々が口を揃えて賞賛する点でもあります。

コミュニケーションツールとしての言語

日本人が海外に出る際、不安を感じる要因の一つが言語、特に英語力の問題です。日本の英語教育では正確な文法や発音、時制を求める傾向が強いため、間違いを恐れて積極的に話そうとしない人が多い事が現状です。多くの日本人は学校で英語を学びますが、日常生活で日本語が中心となるため、実践的な英会話能力を培う機会は限られております。一方で、海外の人々と接する中で実感するのは、言語の完璧さよりも伝えようとする意欲が重要だということです。

多くの外国人は、単語はむしろ単純ですが、表情やジェスチャーで意思を伝えることがほとんどです。さらに文法や時制が多少間違っているにせよ会話を楽しむ傾向があります。ネイティブでない限り、彼らの文法や発音も「無茶苦茶」に近いことがしばしばですが、それでも意思疎通が成立します。この事実、言語がコミュニケーションにおける壁ではなく、単なるツールに過ぎないことを改

めて感じさせられます。さらに、多くの外国人は、日本人が努力して英語を話そうとする姿勢を非常に好意的に受け入れてくれます。間違いを指摘することはなく、むしろこちらが伝えようとする意図を汲み取ろうとする姿勢を見せてくれることが多いのです。このような経験を通じて、英語を「コミュニケーションのためのツール」として再認識し、過度な不安を軽減することができました。重要なのは、間違いを恐れるのではなく、自分の意見を伝えたいという気持ちを持つことです。

幸運なことに、現代では翻訳アプリや音声通訳デバイスなどが発展しており、言語がコミュニケーションにおいて決定的な障害となることは少なくなっています。今回の学会期間中に街を散策している際、地元の教会で式典を開催している団体と出会い、会話を試みる場面がありました。私が英語で「何をしているのか」を尋ねましたが、相手に伝わりませんでした。そのため、翻訳アプリを使い、ドイツ語と日本語で会話を進めることで、無事に意思疎通を図ることができました（写真4）。この経験は、言語が異なっても現代のツールを活用すれば、意思疎通が可能であることを実感させるものでした。

もちろん、英語を含めた多言語を話せることは大きな利点です。しかし、翻訳ツールの助けを借りれば、語学力が十分でなくてもスムーズなコミュニケーションが可能になります。

おわりに

国際学会への参加や異文化交流を通じて、私たち日本人が気づくべきことは多岐にわたります。国際的な舞台上で自分の研究を発信し、最新の知見を学ぶ機会は、自身の成長に大きく寄与するだけでなく、日本全体のプレゼン

ドイツ語

Es hat mit dem Alter nichts zu tun. Es können junge Leute alte ältere Leute beitreten, das ist ein Ritterorden, der auf die Habsburger zurückgeht aus dem Jahr 1333 und da können da gibt es eine große Feier und da werden eben die bekommen die Leute im Orden und ein Buch und ja und eine eine Dokument und ja, da muss man sich halt ein bisschen bewerben, dass man hier teilnehmen kann.



日本語

年齢とは関係ありません。若者も高齢者も参加できます。これは1333年のハプスブルク家に遡る騎士団で、盛大な祝賀会が開催されます。そこで騎士団の人々は本と文書を手に入れます。ここに参加するには少し応募してください。

Nenrei to wa kankei arimasen, Wakamono mo kōrei-sha mo sankā dekimasu. Kore wa 1333-nen no Hapusuburuku-ka ni sakanoboru kishi-dan de, seidaina shukugakai ga kaisai sa remasu. Sokode kishi-dan no hitobito wa hon to bunsho o te ni iremasu. Koko ni sankā suru ni wa sukoshi ōbo shite kudasai.

写真4 翻訳ツールを用いて現地の方と会話をした内容

ス向上にもつながります。また、言語や文化の壁を乗り越えるためには、完璧さを追求するのではなく、相手に伝えようとする意欲が何よりも重要であると実感しました。現代のツールの進化により、言語のハードルが下がっている今、積極的に海外に出て交流を深めることが、これからのグローバル社会で必要とされる姿勢だと感じています。これらの経験が、未来の新たな発見やつながりにつながることを心から期待しています。改めて資金的援助を頂いた公益財団法人京都健康管理研究会に感謝申し上げます。

(京都大学大学院医学研究科附属がん免疫総合研究センター がん免疫治療臨床免疫学部門)

[異文化体験]

2024年アメリカ リウマチ学会の参加記

金下峻也

この度、2024年11月12日から13日にアメリカで開催された第10回 G-CAN（痛風・結晶性関節炎ネットワーク）総会と、14日から19日に開催された2024年アメリカリウマチ学会総会（ACR）に参加した。これらの学会に参加するまで、2022年から2024年にかけてカリフォルニア大学サンディエゴ校に留学しており、そこで得た研究成果を発表したため、本学会での発表に至るまでの過程も含めて、以下に記させて頂く。

留学先について

2022年9月、私はカリフォルニア大学サンディエゴ校（UCSD）の公衆衛生学修士課程（MPH）に入学し、2024年6月に卒業した。在学中は、集団の健康状態を分析し、病気の原因や治療効果を評価する疫学専攻を選択した。UCSDは、数多くのノーベル賞受賞者を輩出しており、日本の利根川進博士も学んだ由緒ある大学である（写真1）。

日本の大学院時代に臨床研究やガイドライン作成に関わる中で、疫学や統計学の重要性を痛感し、体系的に学び直したいという思いが強まった。また、大規模なデータ解析や国際的な研究プロジェクトに参加したいという憧れもあり、家族からの支えもありアメリカ留学を決意した。

留学当初は、英語の授業やディスカッションについていくのに非常に苦労した。特に、課題やテストの準備には時間を要し、何度も



写真1 UCSDの象徴、ガイゼル図書館と卒業式

録音した講義を聞き返しながら、少しずつ理解を深めていった。最終的に成績は全てAで卒業することができたが、入学当初は自分が卒業できるのか、プログラムについていけるのか不安が募る毎日を過ごしていた。その背景には、アメリカの大学では、基本的に期日以内に完成度がある程度満たされた提出物・プレゼンテーションを行えば、単位は取得できるように構成されている。つまりは、欠席などせず学ぶ姿勢が見られる学生には、一定の評価が与えられるよう作られている。

アーサー・カバナン教授との出会い

私はよく留学帰国後になぜUCSDを留学先に選んだのかと聞かれる。国内にも有名なMPHコースが多数存在し、国内でのMPHプログラムに入学するという選択肢もあったが、海外留学への漠然とした憧れや、海外で臨床研究に参加するチャンスを得たいという思い

から、海外の MPH 留学を将来の進路として考え始めた。アメリカの MPH は長い歴史があり、約450の MPH プログラムがある。その中から自分の希望に合った大学に出願する。

ハーバード大学やジョンズホプキンス大学は MPH プログラムで伝統があり有名な大学であるが、私が UCSD の MPH プログラムを選択した理由の一つは、乾癬や乾癬性関節炎の世界的に有名な研究グループ GRAPPA の元副委員長であるアーサー・カバナン教授が UCSD のリウマチ・膠原病科に在籍されておられ、MPH 受験前に日本の元上司を通じて知り合うことができた(写真2)。そのような出会いがあり、UCSD のリウマチ・膠原病科で大学院研究者として受け入れを了承頂いた御縁もあり、UCSD を進路として選択した。

カバナン教授には「Practicum」という公衆衛生に関わる課題に取り組む実習に参加させて頂いた。幸運なことに、その際にカバナン教授の外来に参加させていただき、米国式の外来を実際に参加し肌で感じる事ができた。また、実習中にはリウマチ科で行っている QI (Quality Indicator) 活動という診療の質向上の取り組みにも参加し、その問題点の解決にも取り組んだ。具体的には、関節リウマチの活動評価項目の登録状況を把握し、登録患者数を増やすためどのような取り組みをすればいいか問題を整理し、解決策を示した。

グレッチェン・バンドリ先生、クリスティーナ・チェンバー教授との出会い

アメリカの大学院においては、卒業の必修項目として修士論文または研究計画書の作成が求められる。カバナン教授にも相談を行っ



写真2 カバナン教授との出会い

たが、私が専攻する疫学研究に関連したプロジェクトは存在せず、膠原病科の知り合いの教授を紹介して頂いた。しかし、容易にデータ解析が可能な研究に巡り合うことはできなかった。

困り果てた末、自身が専攻している疫学研究応用編の講義で指導を受けた、グレッチェン・バンドリ先生に相談を試みた。バンドリ教授はカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)の疫学博士課程を修了された経歴を持つ。UCLA は、因果推論という概念を大きく発展させたジューディア・パール教授が所属する疫学研究で有名な名門校である。因果推論とは、二つの事象のうち、どちらが原因でどちらが結果であるかを明確にする学問である。

具体例として、「テレビは子どもの学力を低下させる」という主張がある。テレビを原因、学力低下を結果と考えることは一見容易である。しかし、この因果関係を証明するために、

単にテレビ視聴時間が多い子どもと少ない子どもを比較するだけでは十分ではない。なぜなら、テレビ視聴時間が多い子どもは、経済的に恵まれておらず、塾や習い事などの教育を受ける機会が少ない可能性がある。この場合、学力低下の原因はテレビそのものではなく、社会的な環境の可能性がある。また、テレビ視聴が睡眠時間を短縮させ、その結果として学力低下を引き起こしている場合も考えられる。このような背景要因を「交絡」と呼び、因果関係の評価するにはこれらを調整する必要が求められる。

話が脱線したが、このような因果関係の考察は、疫学研究における真実の追求に不可欠な視点である。バンドリ先生からは様々な因果推論の概念を学んでいたのも、バンドリ先生が膠原病と関連する研究について助言をくださるのではないかと考え、連絡を試みた。偶然にもバンドリ教授は妊娠と薬物の研究を専門とし、膠原病患者についても重要なトピックを研究されておられ、是非一緒に研究を進めましょうと快諾をいただくことができた。自分の関心分野を修士論文のテーマに繋げることができ、嬉しかったことは今でも鮮明に記憶している。

さらに、MotherToBaby Study という、米国・カナダにおける膠原病合併妊娠患者に関する大規模コホートデータを立ち上げたクリスティーナ・チェンバー教授にも研究に参加頂けることになった。このコホートデータを用いて、膠原病合併妊娠患者を対象としたCOVID-19ワクチンの副作用頻度を調査する機会を得ることができた。これらの臨床研究を通じて、MPH 課程で学んだ疫学や生物統計学の知識を実際の研究に応用することができ、まさに学んだ知識を実践で活かす経験をすることができた。

研究の概要と結果

MotherToBaby Study のデータを用いて、COVID-19ワクチンの短期副作用頻度を評価した。その結果、膠原病を合併している患者においても、短期副作用頻度に大きな差は認められなかった。ただし、関節の痛みが強い患者では、1回目のワクチン接種において発熱や頭痛などの全身的な副作用頻度がやや高い傾向が見られた。さらに、薬剤による副作用頻度についてサブ解析を行った結果、ステロイドや抗リウマチ薬の使用状況により異なる傾向が確認された。

特に、抗リウマチ薬のみを使用している患者においては、副作用頻度が低いことが示された。この結果は、膠原病を合併した妊娠患者において、ワクチン接種に対する過度な懸念が不要であることを示唆するとともに、可能であれば膠原病の状態が良くなった状態でワクチン接種を行うことで、副作用頻度を低減できる可能性を示している。ワクチン忌避が公衆衛生上の課題となる中、このような情報は、ワクチン接種を躊躇する膠原病合併妊娠患者にとって貴重な知見であると考えられる。

グマ・モニカ先生、ロバート・ターケタウブ教授との出会い

MPH 課程では、Independent Study という形式で研究室での実習を通じて単位を取得するプログラムが提供されていた。このプログラムは、学んだ知識を実際の研究で活かすことを目的としており、アメリカの教育らしい研究を通して実践的な経験をすることができる。私は膠原病に関わる研究を進めたいという強い思いがあり、カバナン教授に相談したところ、脂肪や食事、代謝を中心に研究しているグマ・モニカ先生（写真3）の研究室を

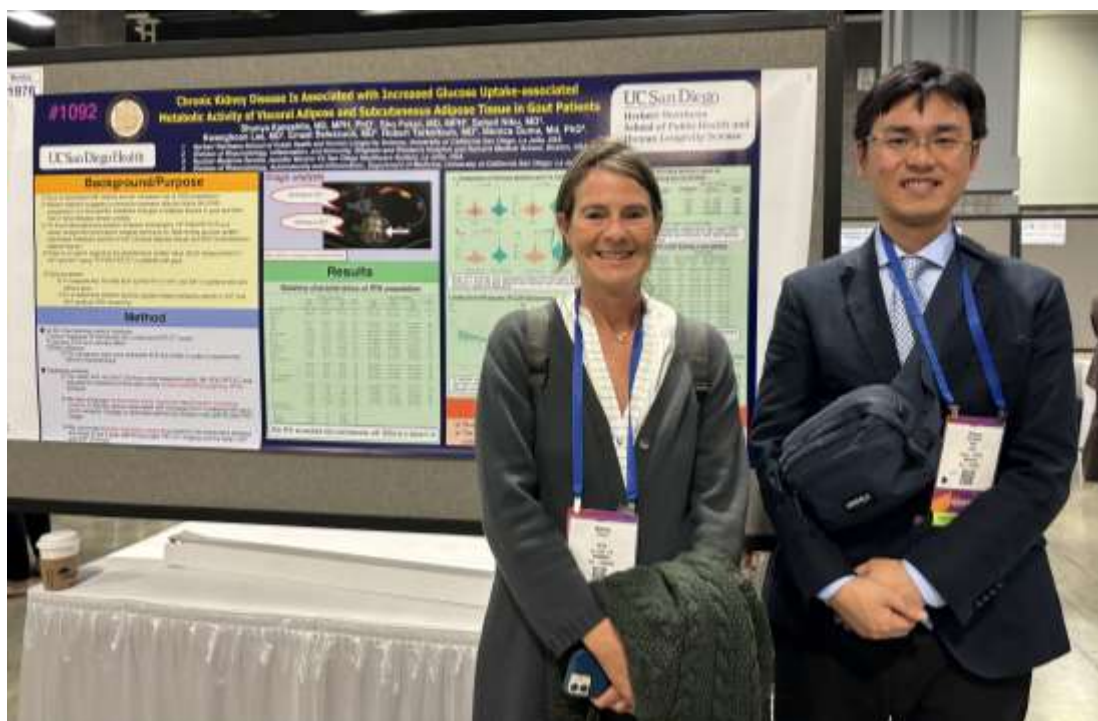


写真3 グマ・モニカ先生とポスター発表の場で

紹介していただいた。ここで、PET-CT という放射線画像を用いた研究に参加する機会を得た。

私は膠原病の中でも尿酸が関与する痛風という疾患に焦点を当て、痛風患者の腹部脂肪の炎症をPET-CTで評価した。具体的には、UCSDで撮影されたリウマチ疾患患者のPET-CTデータから痛風患者を抽出し、皮下脂肪と内臓脂肪のSUV値（PET-CTシグナルの強度）を評価し、コントロール群との違いを評価した。また、偶然にも痛風研究の世界的権威であるロバート・ターケタウブ教授がUCSDの膠原病科に所属しており、ターケタウブ教授のアドバイスを受けながら研究を進めることができた。

研究当初は痛風患者のSUV値のみに焦点が当てられていたが、ターケタウブ教授からは、慢性腎臓病との関連を探ることで研究がより興味深いものになるとの提案を受けた。その

提案の通り研究を進めていく中で、臨床的に大きなインパクトを持つ知見を得ることができた。具体的には、痛風患者において腹部のSUV値が高いことが示された。また、この値が高い場合、痛風患者の慢性腎臓病が進行するリスクがあることが示唆された。PET-CTを用いた脂肪組織の炎症と痛風患者の腎機能障害との関連については未解明な点が多いが、本研究の結果は病態解明や新たな治療介入の可能性につながる重要な知見を提示することができた。

今年のアメリカリウマチ学会では、GLP-1受容体作動薬という2024年に肥満治療に承認がおりた薬剤が、肥満治療だけでなく様々な膠原病疾患に有効であることを示す報告が多数発表された。私の研究結果も、痛風患者の慢性腎臓病進行という、現時点で有効な治療法が明らかにされていない病態に対し、脂肪の炎症を抑えるこれらの薬剤の有用性を裏付

けるデータとなる可能性がある。

ACR のポスター発表

幸いにも UCSD で実施した研究のうち、上記の2つの演題ともにACRのポスター発表として採択された。ACRの開催前にはG-CAN(痛風および結晶性関節炎ネットワーク)の総会があり、ターケタウブ教授が執行委員長を務めている関係もあり、招待して頂き参加する機会を得た。G-CANでは、痛風患者に関する若手研究者の発表や最新の研究報告、痛風寛解の新たな定義の改訂など、痛風研究をリードする専門家たちと交流する貴重な機会を得ることができた。

ACRでは、ポスター発表を通じて多くの研究者から関心を寄せられ、有意義なディスカッションを行うことができた。また、日本から参加していた上司や元同僚と久しぶりに再会し、最新の治療薬や治療法に関する意見交換を行い、日々の診療に役立つ知識をアップデートすることができた。ポスター発表だけでなく、世界中から集まる最新の研究報告やレクチャーに参加するたびに、その内容のレベルの高さに圧倒された。

最近注目されているトピックとして、CAR-T療法という新しい治療法が挙げられる。この治療法により、従来は薬剤による長期的なコントロールが必要だった膠原病疾患を、薬剤治療から離脱できる完全寛解へ導く可能性が報告されている。現在も研究が進行中であり、日本での臨床応用にはまだ数年を要すると見られているが、治療抵抗性の難治性膠原病疾患に適用される日が近づいている。しかしながら、この治療法にはいくつかの課題が山積していることも事実である。世界の研究スピードの速さに圧倒されるとともに、こうした革新的な発見や新しい治療法を日本の医療に

適切に取り入れ、世界の流れから孤立しないようにすることが、今後の日本医療の重要な課題であると学会を通じて改めて痛感した次第である。

最後に

ありがたいことに、今回のG-CANおよびACRへの海外学会参加は、泉孝英記念助成によるサポートを受けて実現することができた。近年、円安による物価の高騰や、ワシントンD.C.のように日本からのアクセスがやや不便な場所での学会開催が影響し、日本人研究者の参加は年々減少している印象を受ける。例えば、学会会場周辺のホテルは1泊あたり日本円で3~4万円程度と高額である。このように、自費のみで国際学会に参加することは経済的負担も多く、研究費やトラベルグラントを獲得して参加している日本人研究者が大半であった。

医学研究は膠原病分野に限らず、日進月歩で進展している。日本から独自の研究を国際学会で発表し、世界の医療技術や治療法を積極的に取り入れるためにも、このような助成制度の存在は研究者にとって視野を広げる貴重な機会を提供している。また、今回の学会参加を通じて改めて感じたことは、研究者や研究テーマとの出会いには偶然の要素が大きく関与しているという点である。このような出会いを一期一会と捉え、今後も自身が行き組む研究に対して丁寧に向き合い、大切に組み組んでいきたいと感じている。最後に、今回の学会参加を支援してくださった公益財団法人京都健康管理研究会の皆様へ深く感謝申し上げます。

(京都府立医科大学大学院医学研究科 免疫内科学)

[高齢者と健康]

高齢者への薬物治療

—医薬分業が完璧ではない我が国で
薬剤師の役割—

乾 賢一

超高齢社会でしかも少子化という現状の中で、誰しも健康寿命を延ばして、最後まで自助自立して生きたいと願っています。自分、家族、周囲の人たち、さらには、国のためにも、自助自立する高齢者が増えることは大切な課題です。

一方、加齢とともに、いろいろな病気や老年症候群、不眠症などの頻度は増えてきています。75歳をすぎると7種類以上の治療薬を飲んでいる割合が25%と、それ以外の年代に比べて増加しています。複数の医療機関から処方されて、思わぬ副作用／相互作用で、心身の不調が現れることがあります。

私は、公益財団法人京都健康管理研究会が啓発活動として継続されている健康講座の依頼をうけて、高齢者の薬物治療についての現状と課題とを話すことになりました。京都健康管理研究会の理事長でもあり、臨床医として中央診療所で日々、外来診療をされている長井先生および、薬剤師とのクロストークという貴重な時間も得られました。

私は薬学の研究（薬剤学）と薬学教育、薬剤師の教育を中心に活動をしてきました。薬剤師を多く輩出している京都薬科大学での学長経験も経て、国際的な視察旅行や国内での医薬分業や薬剤師教育の課題に目をそらすことなく現在も活動を継続しております。

高齢者への薬物治療

現代の子供に「四快のすすめ」というのが

あります。四快とは快眠、快食、快便、快動です。これは子供だけでなく成人にとっても大切です。最近では65歳以上、74歳まではむしろまだまだ元気、75歳以上を高齢者として考えようという動きもあります。

個人差はありますが、年を取ると眠りは浅くなり、食は細く、お通じも以前の様にすっきりとはいきません。また活動も低下します。内臓の働きも衰え、代謝機能が低下し、血圧が安定しなかったり、コレステロール値が高くなったりと、生活習慣病の確率も上がり医療機関を受診する機会は増えます。医師の診察を受け、診断名がつくと、経過観察だけの方もおられますが、多くの方には薬が処方されます。

最近では薬の種類が増えて、作用機序が違ったりと降圧剤、血糖降下剤、睡眠薬といっても身体への作用の仕方は様々です。医師がその人に合った薬を処方し、飲み始めて期待する効果ではない副作用が生じることもあります。薬は服用すると大なり小なり主作用以外の副作用が生じます。主作用を最大限に効かせ、副作用を最小限に抑えるように考えるのが薬剤師の仕事です。例えば、睡眠薬でも誘入眠を誘導するもの、途中覚醒を抑えるものがあり、逆に翌日に眠気が強く残るものもあります。便秘薬を飲みすぎると下痢になったり、痛み止めを飲んで胃腸に不調を感じる方もおられると思います。

薬剤師はどの程度までならこれら副作用が患者さんの日常に影響がないかを考えます。また、加齢とともに血圧が上がったり、血糖値が高くなったり、少し動くと動悸がしたりします。足腰もあちこち痛みます。結果として、高齢者のかなりの方たちは、複数の診療科を受診することになります。現実には、図1に示すように、医療機関で7種類以上の処方

図1 同一の保険薬局で調剤された薬剤種類数（／月）
（平成28年社会医療診療行為別統計）

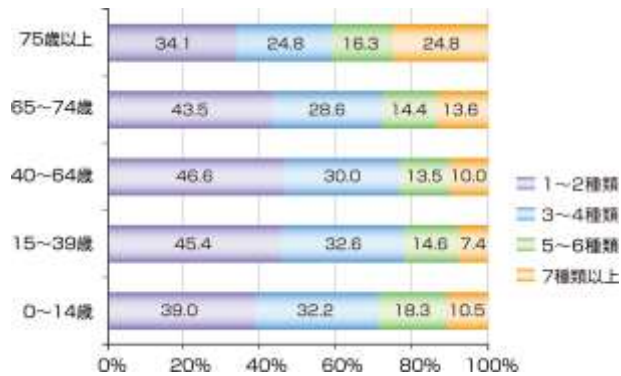


図2 服用薬剤数と薬物有害事象の頻度

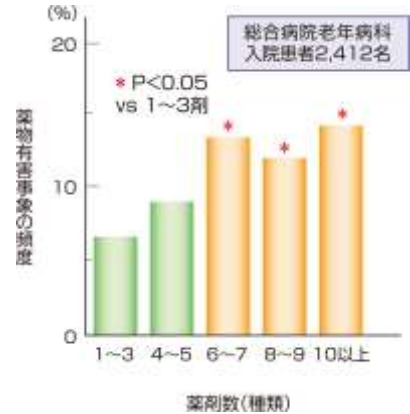


図1、図2、表1：高齢者の医薬品適正使用の指針（厚生労働省 2018年5月）

は、65歳から74歳で13.6%、75歳以上では24.8%と、明らかに増加しています。この結果として、図2に示すように、処方薬が6から7種類、8～9種類、10種類と増えるにしたがって有害事象が増えています。

ポリファーマシーと高齢者の身体の薬物処理の問題

ポリファーマシーとは、多剤の服用に伴い副作用が生じたり、指示通りに薬が飲めなくなることで、日本では6剤以上の場合に見られます。複数の薬の間では相互作用が生じ有害事象を引き起こすことがあります。

薬は主に肝臓か腎臓で代謝され身体の外に排出されますが、この機能が加齢とともに衰えてくると身体の中に長く滞留し、有害事象を引き起こす要因にもなります。これらの副作用によっておこる症状をひっくるめて薬剤起因性老年症候群(表1)と言います。

飲み薬は勿論、塗り薬、貼り薬も含め、体内に入り「吸収」され患部に「分布」。そこで効力を発揮し、その後「排泄」され体外に放出されます。加齢によりこの一連の吸収・分布・代謝・排泄という、体内での薬の処理の過程が首尾よく進まないことがあります。そのため副作用が生じることが多くなるのです。

表1 薬剤起因性老年症候群と主な原因薬剤

症候	薬剤
ふらつき・転倒	降圧薬（特に中枢性降圧薬、α遮断薬、β遮断薬）、睡眠薬、抗不安薬、抗うつ薬、てんかん治療薬、抗精神病薬（フェノチアジン系）、パーキンソン病治療薬（抗コリン薬）、抗ヒスタミン薬（H ₂ 受容体拮抗薬含む）、メマンチン
記憶障害	降圧薬（中枢性降圧薬、α遮断薬、β遮断薬）、睡眠薬・抗不安薬（ベンゾジアゼピン）、抗うつ薬（三環系）、てんかん治療薬、抗精神病薬（フェノチアジン系）、パーキンソン病治療薬、抗ヒスタミン薬（H ₂ 受容体拮抗薬含む）
せん妄	パーキンソン病治療薬、睡眠薬、抗不安薬、抗うつ薬（三環系）、抗ヒスタミン薬（H ₂ 受容体拮抗薬含む）、降圧薬（中枢性降圧薬、β遮断薬）、ジギタリス、抗不整脈薬（リドカイン、メキシレチン）、気管支拡張薬（テオフィリン、アミノフィリン）、副腎皮質ステロイド
抑うつ	中枢性降圧薬、β遮断薬、抗ヒスタミン薬（H ₂ 受容体拮抗薬含む）、抗精神病薬、抗甲状腺薬、副腎皮質ステロイド
食欲低下	非ステロイド性抗炎症薬（NSAID）、アスピリン、緩下剤、抗不安薬、抗精神病薬、パーキンソン病治療薬（抗コリン薬）、選択的セロトニン再取り込み阻害薬（SSRI）、コリンエステラーゼ阻害薬、ビスホスホネート、ビダアナイド
便秘	睡眠薬・抗不安薬（ベンゾジアゼピン）、抗うつ薬（三環系）、過活動膀胱治療薬（ムスカリン受容体拮抗薬）、腸管鎮痛薬（アトロピン、ブチルスコポラミン）、抗ヒスタミン薬（H ₂ 受容体拮抗薬含む）、αグルコシダーゼ阻害薬、抗精神病薬（フェノチアジン系）、パーキンソン病治療薬（抗コリン薬）
排尿障害・尿失禁	抗うつ薬（三環系）、過活動膀胱治療薬（ムスカリン受容体拮抗薬）、腸管鎮痛薬（アトロピン、ブチルスコポラミン）、抗ヒスタミン薬（H ₂ 受容体拮抗薬含む）、睡眠薬・抗不安薬（ベンゾジアゼピン）、抗精神病薬（フェノチアジン系）、トリヘキシフェニジル、α遮断薬、利尿薬

高齢者が薬をのむための課題と工夫

加齢により記憶力も低下して、薬の服用を忘れると、治療効果が出ない可能性がでてきます。地域にかかりつけの医師、薬剤師がいて、個人の長い経過を知っていることは治療にあたって重要なことですが、現実には、ほとんど絵にかいた餅かもしれません。

医師が「安心を処方」して、薬剤師が安全に薬を飲むことの手助けをすることを、少しでも実施したいという姿勢を医師、薬剤師相互に工夫していくことが重要です。

安心を処方するためには、適正な薬物療法、最適な薬剤の選択、情報提供：薬の情報（効能効果、副作用、飲み合わせ等）を分かりやすく説明すること、効果の実感や疑問や不安を相談する体制作りなどが重要です。

安全に薬を飲むためには、かかりつけ医と同様、一人の薬剤師（かかりつけ薬剤師）と信頼関係を築ければ、薬に関する情報を一元管理でき安心感を得られ、マイナ保険証導入の意もここにあります。

*お薬手帳：複数の医療機関で処方された薬の重複や相互作用をチェックできる。

*一包化：一回分の薬を一包にまとめることで服用ミスを防ぐ。

*お薬カレンダー：服用のタイミングを視覚的に確認出来、飲み忘れが防げる。

などを薬剤師が管理します。

医師の仕事は診断と治療方針の決定ですが、薬物治療の場合に安全に治療されているかを見守るのが薬剤師の責務です。医師、看護師などの他の医療従事者と連携していくことも重要です。現実には、大病院では、医師の診察室と薬剤師の勤務する薬局とははなれており、対面での意見交換は困難です。

一方、中央診療所のように、診察室と薬局がきわめて近接していると、薬剤師も実際

の患者を観察し、診療情報を画像や機能検査などを含めて直接に知ることができます。そこで、薬剤師からの薬に関する知識やアドバイスを医師も受け取り、相互に病気と患者についての薬物治療に関し経験を蓄積していける状況がまさに、医薬分業と協業ではないかと思います。

高齢者の薬物治療についての総括的な課題

高齢者は病気を複数抱えることが多く、それぞれに異なった医師から薬物治療をうけることが多いために、ポリファーマシーという状態で種々の副作用が予想されます。加えて、認知症や薬管理の億劫さ、指先の不自由さなどから処方とおりには薬がのめていないという過少治療から、効果がでていない可能性が考えられます。

さらに、高齢者の加齢に伴う種々の老年症候群にたいして、第一に、薬物治療が選択されることは妥当であるのかどうかという問題もあります。かかりつけ医、かかりつけ薬剤師として患者さんの加齢の過程を観察しているわけではない現状を考えますと、優先される選択の中に、観察しながらの経過観察、薬物以外の医療行為の介入（理学療法、カウンセリング、栄養指導、など）がもっと日常的にあってもいいのではないかと思います。

しかし、現在の医療システムでは、増加している高齢者にきめ細かい指導をすることは難しいでしょう。少なくとも、妥当なロジックや経験からくる知恵や知識なしに、高価な薬をすぐに導入したり、症状に対して安易に薬を処方するということは医師も控えるべきでしょう。さらに、この過程に、薬剤師ももっと介入できればよいと考えます。

（京都大学名誉教授／京都薬科大学元学長）

[高齢者と健康]

鹿児島県の高齢者 医療・介護事情

袁輪一文

泉 孝英先生を偲ぶ会に参加させて頂いた折に長井先生より、「鹿児島の高齢者医療について思うところを寄稿して下さい」とご依頼を頂きました。泉先生の追悼文集でも触れましたが、私は1993(平成5)年4月から翌1994年9月まで、胸部疾患研究所第2内科講座の門下生に加えて頂いたことがあります。

私は大学卒業後直ぐに鹿児島民医連へ入社して8年目の一般内科医でしたが、泉先生は思想信条にかかわらず快く受け容れて下さいました。現在は鹿児島民医連のセンター病院である鹿児島生協病院の門前診、谷山生協クリニックの院長を務めながら、病院で入院患者も診ております。高齢者医療といっても固有な傾向はありませんので、鹿児島県の地理

的な特徴を中心に書いてみたいと思います。

鹿児島県(図1)はご存じの通り九州の南端に位置し、桜島を中心とした錦江湾を取り囲む馬蹄形の本土と八代海に浮かぶ島々、Dr.コトーでお馴染みの甕島、世界遺産の屋久島、鉄砲伝来の種子島、吐噶喇(トカラ)列島、これまた世界遺産の奄美諸島と多くの離島を抱えており南北600km弱あります。余談ですが鹿児島県本土の地図を南北さかさまにすると、薩摩半島と大隅半島は二頭の鹿が向かい合った形になります(図2)。

鹿児島市(59.3万人)と大手の電子機器メーカーのある霧島市(12.3万人)および双方のベッドタウンである始良市(7.8万人)に県全体の人口の157万人の50%が集中しており、熊本県・宮崎県との県境の山間部、薩摩半島・大隅半島先端部や島しょ部は過疎が進行しています(図3)。本稿では①都市部、②本土の過疎地域、③離島部に分けて述べたいと思います。



図2 二頭の鹿(素材ラボより改変)



図1 鹿児島県(マピオンより改変)



図3 一部過疎・過疎地域(全国過疎地域連盟より)

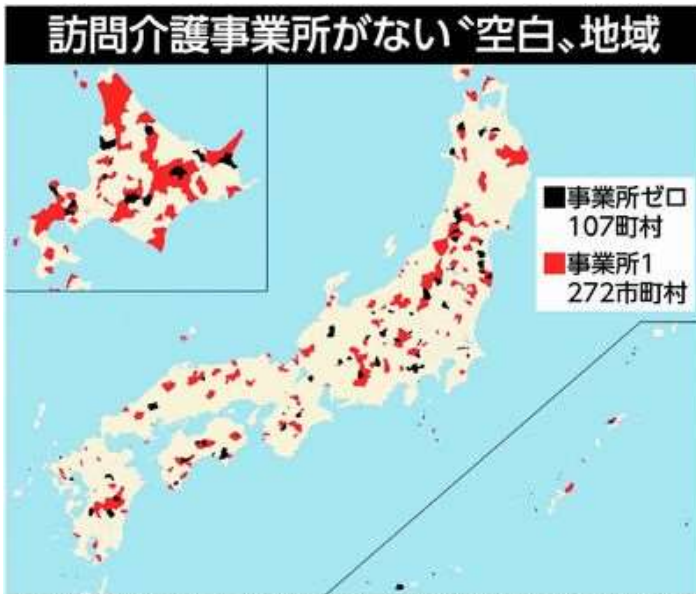


図4 訪問介護事業所がない空白地域
(厚生労働省が公表した全国の事業所一覧(2024年12月末時点)から作成)

図5
半年間で進んだ
訪問介護事業所の消滅

	2024年 6月末	⇒	2024年 12月末
事業所ゼロ	97 町村	⇒	107 町村
残り1	277 市町村	⇒	272 市町村
総事業所数	3万 5078 カ所	⇒	3万 4499 カ所

(しんぶん赤旗より改変)

①都市部

私が勤務している鹿児島生協病院は鹿児島市の南部、薩摩半島の付け根に位置していません。都市部は今後2030年頃まで人口据え置き、高齢人口自体は増えていきます。老人保健施設、特別養護老人ホーム、高価な入居費の有料老人ホームも揃っており、往診診療所、訪問看護ステーション、介護保険関連のサービスも現時点では充実しています。

②本土の過疎地域

昨年8月末には台風が薩摩半島南端の枕崎市を掠めました。その後最長5日間停電が発生し、冷蔵・冷凍食品を扱う店は軒並み食品廃棄となりました。そのため十数キロ離れた電源の復旧した地域への買い出しが必要となり、一時大変な状況に陥りました。このことは能登半島地震で経験した生活、医療の危機を想起させ、ひとたび災害、例えば南海トラフ地震などが発生すれば医療はおろか生活が崩壊する可能性を身近に感じました。

この地域は介護保険料も高い一方で介護サ

ービスを提供する事業所が次々に閉鎖されています。ただ高齢化の極期を過ぎており、高齢者自体も減少しつつあります。家族の介護力も減衰し、都市部に家族が移住していると介護認定に伴い引き取られていく状況もあります。

引き下げられた介護報酬では経営が成り立たず、訪問看護・介護事業所の閉鎖が進んでいます。例えば南さつま市は県立薩南病院を擁し、薩摩半島南部の医療の中心地であるにもかかわらず訪問入浴の提供が皆無で、40km以上離れた鹿児島市の事業所から提供せざるを得ない状況があります。2024年は全国で過去最多の170件以上の介護事業所倒産を数え、訪問介護事業所0カ所の自治体が107自治体、1カ所が272自治体、鹿児島県でも0カ所が3自治体、1カ所が4自治体との報告があります(図4、5)。

③離島部

私たち鹿児島民医連に加盟している奄美中央病院(院長の平元良英先生も泉先生の門下

生です)が奄美市にある関係で奄美大島の現状について述べたいと思います。

奄美大島全体で5.6万人、奄美市が4万人弱の人口で辛うじて1医療圏として成り立っています。救急医療は本土まで飛行可能なドクターヘリを持つ県立大島病院が担っています。それ以外は慢性期を主とした病院、診療所となります。過疎が進行していることは一緒ですが、離島といった閉鎖空間のため、良し悪しは別として地域のしっかりしたコミュニティー、お年寄りを大切に作る風習がまだ残っています。そのため治療・リハビリテーション・在宅医療のサイクルが比較的好循環しており、総合診療領域の教科書的な面もあります。

過疎地の医療は取りも直さず高齢者医療そのものです。私が勤めている鹿児島生協病院は「地理的離島はあっても、人の命に離島があってはならない」といったキャッチフレーズの下、ローテーションで離島医療を担う医師を育てることをその主たる任務として発展してきたセンター病院でした。現在も初期研修医の応募があり、総合的に幅広い研修は可能ですが、徐々にその意識は薄れつつあります。離島には見向きもせず「とても良い研修が出来ました。ありがとうございます」と次のキャリアへ行ってしまいます。これもご時世と思う反面、堂々と美容整形へ去って行かれるとやはり気落ちします。

私が研修医だった頃、離島では医療情報が圧倒的に不足しており、最新の医療情報は月1回訪問して来る製薬会社のMRさんからもたらされるものが多くを占めていました。現在のネット社会では医療情報はもとより医療講演会についても何処からでもWEBで参加可能となり、ハンディは無い様に思われます。総合診療・家庭医療を目指す医師は一定数い

るのですが、残念ながら地理的離島といったハンディは厳然として存在します。余談ですが、離島の過疎が進み無人島が増えてくると国防の面でも大きな危惧が生まれます。

これらは日本国内いずれの地域でも起きている事象と考えられます。本来医療保険の負担軽減のために設計・施行された介護保険ですが、マンパワーを最大限要する介護分野を低い介護報酬で賄うこと自体が無理な話です。外国人労働者に頼る状況になりつつありますが、そもそも賃金が低い状況では他国に遅れを取っており、また日本は移民に対して寛容でなく意識改革も求められます。

医師の偏在についても経済格差・教育格差に基づいた医学教育・医師養成、専門領域偏重のキャリアパスといった根本に変化がない限り、インセンティブを導入しても医師の偏在、過疎地域の医療・介護に大きな変化は起こらないのではないかと個人的には考えています。ドイツでは診療科ごとの開業数を地域別に制限しているとのことですが、医師の偏在を大きく改善出来ていない様です。泉先生がかねがね言われていた様に、医療を社会インフラと考え国営にでもしなければ解決しないのかもしれませんが。

取り留めの無い話となってしまいました。この健康塾通信の趣旨に沿うかどうかわかりませんが、寄稿させていただきます。

(鹿児島医療生活協同組合 谷山生協クリニック院長)

《参考資料》

- (1)一般社団法人全国過疎地域連盟ホームページより
- (2)マピオン、素材ラボより
- (3)しんぶん赤旗電子版「訪問介護 “空白、加速” 2025/01/10
- (4)吉田恵子「開業規制を導入したドイツで起きたこと」日経メディカル：2025/01/17

[高齢者と健康]

「生、労、描、志」それぞれの
生きざま探訪 (第1回)

洛中のインターナショナル理髪店

下前國弘/長井苑子

当公益財団は、若手の異文化体験のために主に難病関係の臨床研究に対して研究助成、国際学会参加や留学助成をして4年がすぎた。泉名誉理事長の夢であった第一の課題を引継ぎ、毎年たくさんの応募から妥当な評価をして候補者を決定するという作業を継続してきている。年々、新しい技法やAIなどの導入という時代背景をひしひしと感じながら応募書類に目を通すことが年末行事となった。知的刺激をあれこれ受けることは、やはり貴重な時間であると感じている。

加えて、当公益財団には第2の課題ができた。夢の実現の途中で無念にも旅立たなければならなかった泉先生の病との日々からのメッセージ、高齢者の健康、医療、介護への探索と啓発とを第2の課題として活動を継続することである。この課題のおかげで、鳥瞰図的な情報集め、臨床的な情報集め、人、一人一人の具体的な日々から得られる情報集め、などなどが必須の仕事となってきた。診察室、新聞、本、テレビ、インターネット、雑談などから、課題2を意識していると、小さな用語、事象などでも意識に残ってくるのである。小さな場所において、井の中の蛙ではあるが、井戸の中からも大空を見よう、見たい、見なければという思いである。

健康塾通信には令和2年10月以降、多くの方々には多彩な原稿をいただき、心待ちする読者もおられる現状、ますます健康塾通信の充実を願っている。

一方、書くという多大なエネルギーをお願いせずに、対談も含めてご紹介したいという方たちもたくさんおられるので、紹介シリーズを作ることとした。一人一人の高齢の日々、それはそれまでの人生を反映しており、健康寿命と関連している要素も散りばめられているように思うのである。閑話休題的な読みやすさでご紹介できればと思う。

すでに85歳を超えて元気に仕事をされている人や、趣味か仕事かわからないけれど手を使う仕事に時間を忘れて90歳の元気印、高齢者介護の現場に活躍する後期高齢者の元気印などの方からは寄稿をいただいている。

最近では、86歳になってもエレベーターやエスカレーターを使わないで階段昇降が平気な高齢者の患者さんから話を伺った。聞けば、子供のころから坂道の上の家に住み、現在も別の土地であるが、やはり坂道の上の家に住み日々荷物を担いで坂道を上り下りしているという人だ。姿勢がしゃんとして揺らぎがない。若いころの生活習慣が大きいのであろうかと、わが身を顧みるが時すでに遅い。

90歳になる女性は、囲碁の集会所に行きたいがために、いまだに車を運転して、認知機能テストと実技試験にも合格したという。ほかにも複数の趣味があり、これらを語るときの表情は生き生きしている。聞けば、家庭の主婦であったが、亡き主人から手ほどきをうけた囲碁にはまったということである。好奇心がこの人の心身を元気にしているようである。

思い出しても、本当に、いろいろな健康寿命維持にかかわる示唆的な情報には事欠かない。自分が実践はなかなかできないが、やはり、記録集積しておくことには意味がありそうである。というわけで、第一回の人物紹介をはじめることとする。

洛中のインターナショナル理髪店

下前國弘さんは80歳で現役の床屋さん。最近、KBS 放送でご自分のこれまでをお話されている。60年以上も中京区姉小路通柳馬場で仕事されておられる。三条堺町のイノダコーヒ本店の大きな円卓、5番テーブルの主である。ここでは、幅広い人たちが集まり、毎朝の会話が重ねられてゆ

く。泉先生も、洛中で仕事をはじめてから、地域情報集積かねて、病が進行するまで、毎朝、5番テーブルが居場所であった。

下前さんは6800回を超える“柳居子徒然”というブログを毎日書き続け、アップロード



されておられる。京ことばの語り部として東京で語りの会を4回されている。ブログには漢字が多いが、なんと広辞苑を1冊読みつぶしたとのことである。京都の文化人財の一人であろうと評価している。

ご本人曰く、「私は、井の中の蛙で大海を知らないが、井戸の中から大空の状態を見上げることはできる」と。4年前から急に増えてきたという外人客は、実に全世界から。来客の一人が YouTube に下前理髪店の動画をだしてから特に増えているという。世界地図に客の出身国を印してきたが、最近では御朱印帳に名前とメッセージなどをそれぞれの母国語で記載してもらっているという。

(文責：長井苑子)

《令和6年の柳居子徒然ブログから》

柳居子スタイル

途切れることなくやって来る遠来の客人の数は、この4年間ほどで施術後のメッセージを残してくれた人数だけでも800人を超える。メッセージを書いて貰えずに送り出す人数も



結構多いから、1,000人は超えると思われる。

遠来の客人の頭を刈っていて思う事は、鋏を使って刈り込むという柳居子が若い時から身に付けたカット技術は、時代遅れなのか鋏で刈り込むという技術は身に付けず、電動バリカンを使っての仕事とか技術が席卷している。バリカンを使わずに鋏だけで仕事を

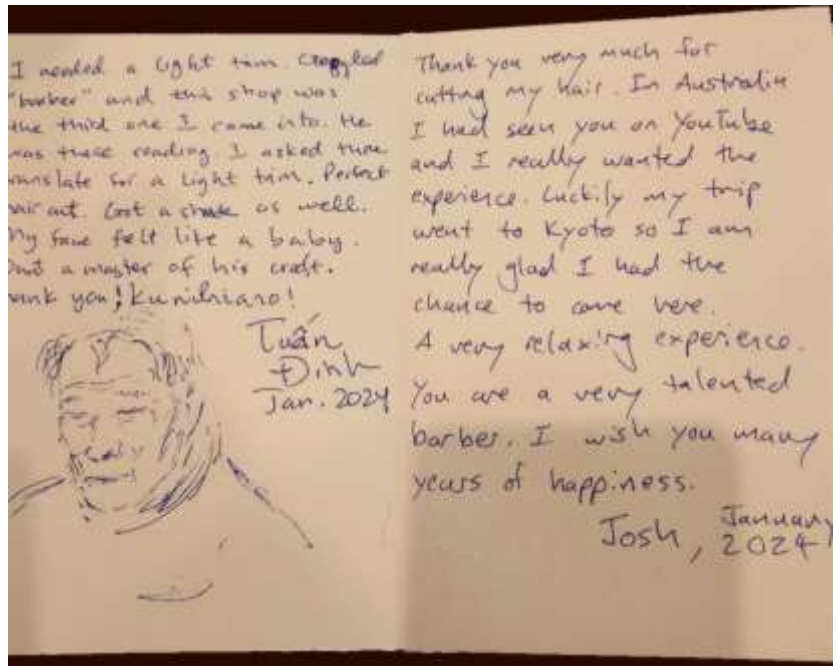
はじめると不思議な顔をされる、

バリカン主導でカットをすると如何しても上の長い髪との接合線が問題となる。少し長めに刈れるバリカンを使い我々世代がトラ刈りと言うスタイルが世に広がっている。

理髪師がそういうスタイルしか出来ないとか被技術者、客も其のスタイルに納得する様だ。柳居子は、先ず頭髪を熱いタオルで濡らしてその人が本来持っている髪の生え方とか量を漉き鋏で刈り込み、何も整髪剤を付けなくも左右均等シンメトリーに納まる様に粗くカットする。

ジェスチャーは言葉が通じ無い人には大事な事で、客の髪の上部の髪を捌いで出来上がりのラインを確認すると『よし、これでよし』という顔やポーズをとって相手に無言の同意を得る、細かく切り揃える仕事に入ると相手は全幅の信頼を寄せてくれている事が判る。

日本人の客人との仕事のプロセスが逆になるのだが、一寸手間を掛ける事が始めて入った異国の床屋が愉しく緊張がほぐれる場所に



なったら良いと思うのだ。

スマホの画面を見せつけられて、この様にカットしてくれと迫られても「全く同じようには刈れないが60年以上のキャリアが有り、貴方に似合う髪型に刈る自信はあるが、任すか?」。「任す」の言質を取ってから仕事に取り掛かる。自分のやり方、自分のスタイルを貫いている。

又、日本に来たら必ず此処へ伺いますと言うメッセージに対しては、次来る時は指を天井指し示し、多分、上の世界に居る、今回限りと伝える。

定休日の営業：其の貳

昨日は振替休日の定休日だったが、旧い御常連の予約を頂いていたから客人お越しの準備をして朝の珈琲屋へ出掛けた。次々と空き席待ちから招じ入れられる客人の内、外国人の多い事、十人入って来る客の内半数以上が異国の人だった。色々な言葉が飛び交う。

店に戻ってご予約の一人を済ませたら次は

何をしようか、何処かへ行こうかと思って居たがそういう展開にはならなかった。クルクル回るサインポール、あめん棒は廻さず、入口の戸も鍵はかけなかったが、戸をあけて入って来た客人は、予約の人以外に日本人もう1人と、海の向こうからの遠来4人、結局6人の仕事をする事になった。

ベルギーからやって来た若者。肩口にまで30センチ以上伸びきった髪を、予めスマホ画面日本語表示では『あまり短くせず、短くカットしてください』意味不可解なコメント。柳居子の一番苦手の客。「貴方のお気に入りにカットする自信が無い」と言ったのだが、「貴方にお任せします」と言われて取り掛かった。

二度とやって来る客では無いと思ったから、取り敢えず適当にブロックした髪を鋏ばさみで30センチの髪を全体15センチに切り揃え、髪の毛が納まりよく左右シンメトリーになる事だけを考えてカットを終えた。とてもいつもの仕事とは程遠い出来上がりを合わせ鏡で見せたら、『貴方は私の欲するヘアカットを完全に果たしてくれました。有り難う』と、スマホ画面を介して言われた。

濃い目の髭もツルツルに剃りあげたら『必ず又、此処へ戻ってきます』と言われたので年齢を明かした。次は無い、今日限りの散髪と顔剃りと言ったら一緒に写真撮らせて下さいと言われ、写真に納まった。



振替休日なんて通用しない人達。自分の手や指先だけで国際親善が出来るのは結構な事だが昼食が午後4時になった。まあ何処に出掛けるという予定も無かったから、イタリーからの客人は頭髪と髭全部剃り落しの注文。首から上、Skinhead、Skinface。剃刀持って剃り落としたこちらも、ツルツル頭を撫ぜ廻して心地良かったから、ご本人は生涯一度の体験、ライフタイム、ワンスオンリー。吃驚した事と思う。

朝の珈琲屋の外国人来客率と柳居子の店の外国人来客率が同じだと思ったのだ。

(下前國弘／京都市中京区在住)

[高齢者と健康]

京都祇園と豪州 シドニーが繋がる話

川本卓史

(一)

「京都活動日記」と題するブログを長年インターネットに載せている。当初は、京都勤務に際して、学生や NPO 仲間との情報共有に活用するのが目的だった。引退して東京に引き上げてからも週に1回書き続けている。しかし最近、埒もない私事的话题が多くなり、長い退屈な私の文章を読む人はごく少ない。それでも続けているのは、私自身の備忘録の効用が大きいのと、フェイスブック (FB) と繋いでいるので、時々「お友達」がコメントを寄せてくれるのが嬉しいという二つの理由だと思う。

コメントを頂く常連が、京都で知り合った岡村邦彦さんである。同氏は祇園で生まれ、育ち、今も生まれ育った家で暮らし、長年、町会長を務めておられる。大学卒業後すぐ、五木寛之の『青年は荒野をめざす』を読んで感激し、独りで海外を旅した体験があり、目下その回想録を本誌「健康塾通信」に連載中である。

前置きが長くなったが、今回はその岡村さんと豪州シドニーに永住しておられる野田桂子さんとが、私のブログを通して繋がったという話である。

(二)

①発端は昨年 (2024年) 夏。ブログにいつものように岡村さんからコメントを頂いた。彼のコメントは長文で読み応えがあり、祇

園祭や都おどりなど、自分で撮った京都の四季折々の写真も載せてくれて、愉しく読ませてもらっている。この時は、祇園の舞妓さん6人が写っている古い写真だった。岡村さんご自身の姉上も写っている。姉上の舞妓名が壽榮子で、偶然にも私の亡き母の名前と同じだと教えてくれた (むろん私の母は実名であり、美貌でもなく残念ながら舞妓とは縁もゆかりもない)。

②「FB」友達の野田桂子さんがすぐにシドニーから投稿してくれた。彼女は岡村さんとは一面識もない。30年以上昔、私がシドニー駐在で3年半暮らした時に知り合った。駐在員向けの「クラブ」を開いておられた。和服のとびきり似合う、上品な素敵な女性で「マドンナ」と呼ばれて人気抜群だった。夫は、銀座にある老舗のおでん屋の三男だと聞いた。

③「川本さんのお話に、失礼ながら立ち入らせて頂きますことお許しください。お写真を拝見して、あんまり懐かしくて！」で始まる投稿だった。「舞妓さん6人」のうち4人は、大昔、祇園で何度も会ったそうで、今でも名前まで記憶しているとのこと。

④これを読んだ岡村さんから早速、「本当に驚きました。嬉しかったです」と返事があった。おまけに、「50年以上も昔、海外独り旅をしたときにシドニーにも滞在した。頼まれて TV 番組に日本兵の役で出演した」という思い出話まで披露されて、野田さんはさらにびっくり。「お陰様で大昔を振り返り、祇園の皆様を思い出し、父を懐かしみ、幸せな時間を過ごしました」とお礼が返された。

⑤補足の説明があり、「父は代々の京都人。袋帯をデザインしていて、昭和の能装束百着を遺して亡くなった」。「我が家は子供も連

れて、家族で祇園に行くという変わった家でしたので、舞妓さんたちを知っていました」とある。父親は西陣織の名匠で、舞妓さんの帯を幾つも作っており、祇園との付き合いも深く、当時若かった桂子さんも一緒のことが多かったというのである。岡村さんのコメントと古い写真を見て、「懐かしい」と反応した理由がよく理解できた。そして祇園とは、お客さんが時には家族ぐるみで訪れる場所でもあったのだと初めて知り、京都にはこんな粋な文化があるのだとひとつ勉強した。

(三)

この話はその後も進展する。

- ①同じ年の秋。岡村さんが卒業した祇園小学校のクラス会があった。「舞妓さん6人」の一人である村上さん（舞妓名夫美乃）も小学校の同級生で、再会し、思い出話になった。彼女は、舞妓さん時代に野田さんの父上がデザインした帯を締めて写っている自分の写真まで持ってきて、見せてくれた。
- ②見せられた彼は親切にも、村上さんにクリスマスカードを書いてもらい、この写真を添えて、シドニーの野田さんに送ってくれた。
- ③以下、岡村さんから頂いた報告を一部引用させて頂く。
 - ・「野田さんからは、老いて身体も弱くなり気難しいお父様だったようで、村上さんがよく面倒を見てくれて助かったと家族全員が感謝しているという話でした」。
 - ・「(これを聞いて村上さんは)「なんにもしてへんえ」と言っていますが、彼女からは、お父様にお多幸（銀座に本店がある有名なおでん屋）に連れて行って貰いお母様とも一緒に話話を聞きました。このような付

き合いがあった事自体に感心しています」。

- ・「桂子さんにも、とっても優しくしてもらった事が忘れられないようです」。そして、「桂子さんと同じく彼女もご主人を亡くした事を知りました。手紙を添えて昨日クリスマスカードを送りました」。

(四)

門外漢の私としてはこの間、京都祇園とシドニーとのフェイスブックを通じたやり取りを眺めて、彼らの心情を思いやるだけだった。野田桂子さんにとっては、懐かしい過去を思い出す、さぞ印象深い出来事だったろう。

そしてここまで話が進展したのは、岡村さんの親切と気遣いが大きかった。さらには、祇園の舞妓さんと野田さん一家との家族ぐるみの交流も、岡村さんが「感心した」と言うほどのものだった。しかも、老いた父上の面倒もみてくれたことのお礼を言われて、「なんにもしてへんえ」という京言葉で返すあたりに、祇園舞妓の気風（きつぷ）を感じさせられた。

何と言っても、私のFBを通してこういう交流が可能になったことが嬉しかった。これもインターネットという文明の利器あればこそだろう。私がシドニーを再訪し野田さんに再会したのは10年も昔が最後で、これからもう機会はないだろう。しかし老人でもそれなりにネット社会の恩恵を受けることは可能なのだ。

この年になると善行とは縁のない日々だが、ほんの少し良いことをした気持になり、私も幸せを少し頂き、お礼を言いたいのはこちらの方なのである。

(元京都文教大学教授)

90歳になりました

坂本清音

何十年前のことだろうか。名古屋に「きんさん・ぎんさん」という100歳の双子の可愛なおばあさんが居られて、日本中のマスコミを賑わしていたことがあった。それが今や、日本中に100歳を超えるご老人が何万人も居られるというご時世となった。

そして2025年の今、私は90歳を何とか元気で迎え、100歳まで生きれば以後10年はこの世での生が続くかもしれないという立ち位置に居る。

考えてみると、私は若い頃から生きていく限り、今日よりも明日、明日よりも明後日には何かしら希望の持てる翌日が待っている、と思いついていた。だから、青春時代（特に結婚前）によく言われた言葉、「今が一番良い時だから…」には違和感があり、結婚したら、もっと良い日が待っているはずと心の中で反発していたことをよく覚えている（実際の結婚生活では、経済的には辛い面も多々あったが、私の生き方を認めてくれる連れ合いとの出会いもあり、その確信はほぼ実現した）。

私が疑うことなくそう考え、そのように生きてきた背後には、少なくとも二つの理由が考えられる。一つは母と3歳で死別したこと、もう一つは我が家が祖父母の時代からクリスチャンファミリーだったことだ。

私は大阪で生まれたのだが、母の逝去後は兄姉と共に岡山の祖父母の許で育てられた。祖母の親友でキリスト教の幼稚園を経営しておられる方がいたからか、私は引っ越すと、

すぐにその幼稚園に通い始め、3年保育を受けることになる。

後になって知るのだが、キリスト教保育の根本は、まず徹底的な自己肯定感、言い方を変えると、「あなたはそのままでもいいんだよ」を、とことん教えることだそう。それがしっかり身についた後で、次は「共に生きる社会と、世界をつくる自律的な人間として育つ」へと進むとのこと。

突然母が居なくなり、寄る辺ない思いをしていた時に、イエス・キリストを通して示される神の愛と恵みの教えは、私の身体の芯にまで染み込んだのであろう。その後、キリスト教主義に基づく大学に進学し、年齢に応じて、その価値観を理論と指導教授との交わりを通して実感できたことも、その教えが私の中に根づくのにプラスしたかもしれない。

もう一つの理由に挙げたクリスチャンファミリーだったという条件の中でも、我が家は特殊だったかもしれない。というのは、祖父母が明治の初期に、共に同志社（祖父は普通学校と政法学校、祖母は女学校）で学び、教会学校教師として知り合ったようなのだが、結婚して岡山に住むようになった後も、全く対等の夫婦生活を送っていた。

どちらかと言えば、祖父は書齋型ではあったが、それでも二人共、社会に出て活躍していた。換言すると、我が家には祖父母の代から男女差別がなかったと言える。よく私の同年輩、いやもっと若い世代でも、男児は4年制大学、女児は短大で十分という風潮が一般的だった時代に、我が家では女児・男児の区別なく平等に育てられて大学に進学。そこで出会った結婚相手もクリスチャンで、夫婦対等の生活を良しとしたことも、比較的少ない例だったかもしれない。

結婚10年後、母校に大学院ができた時、5

歳と2歳の子供を抱えながらも迷わず進学を希望し、夫も応援してくれたことは、その後の私のキャリアを決定的にした。すなわち院終了後約30年間、教師として母校に留まって、学生時代に受けた学恩と「人一人は大切」の教育を、そのまま後輩の教育に活かすことができたのは、それまでの生き方を貫く道に通じたのであろう。そして、現在なお、母校の歴史を書き留めておくことをミッションと考え、思考力も持続力も衰えていることを自覚しながらも、「楽しく」勉学を続ける幸せを、日々味わっている。

戦争中、そして戦後の窮乏生活を生き抜いた経験から、私はバブル期のグルメ嗜好にも関心がなく、日本の伝統的な食事を基本とし、必要なものは食物から摂るよう工夫すれば十分と固く信じて、いまだに薬なし・サプリ利用せずの日常生活を送っている（最近になって、これが出来ているのは自分が丈夫な体に恵まれていたからと認識しつつあるのだが）。

またキリスト教の神と人との関係は、神から与えられる愛や恵みを受け取るだけでなく、神の求めに応答して生きることだと教わってきた。「喜んで引き受ける」ことが大切との信条のもとに自律し、ストレスなしに生きてきたことも、90歳になって元気である素かもしれない。

「ありのままがいい」という生き方は、他人と比べて、自分を偽らないでいいこと、言い換えると、「知らないことは知らない」と平気で言い、逆に「知らないことを知っているふりをする方が恥ずかしい」という生き方の実践である。だから何歳になっても、「それまで



知らなかったことは好奇心を持って学び始め」、「新しいことに気負いなく恐れなくチャレンジする」ことができているのかも知れない。

これまでの私の生き方はキリスト教の信仰に支えられていたとはいえ、独善的で、どうしようもなく「おめでとう」人間だと呆れられるかもしれない。しかし、これからも矢張り神の召しに応えつつ、人生の最後まで前向きに生きることができればと望んでいる。

(同志社女子大学名誉教授)

[エッセイ]

ナラノヤエザクラと 知足院

菅沼俊彦

昨年のNHK大河ドラマは「光る君へ」で、平安文学の世界的傑作「源氏物語」の作者紫式部を主人公とするものであった。紫式部と同じく一条天皇の御代に、中宮・彰子に仕えた女房の一人に伊勢大輔（いせのたいふ）という歌人がいる。小倉百人一首第61番は彼女の作である。

いにしへの 奈良の都の 八重桜
けふ九重に 匂ひぬるかな

古都奈良から毎年宮中に届けられる桜の花を受け取り、中宮彰子に献上する役に、紫式部の後に新人女房の彼女が抜擢された。その桜の枝が届いた折に、藤原道長から歌を読めと急に言われ、花を見て彼女がとっさ詠んだのが、この歌とされている。

“いにしえ”と“けふ”、“八重”と“九重”の対語を使い、さらに“このえ”は九重の門がある宮中をさし、“匂ひぬる”は花の咲き誇る様を表し、一条天皇の御代の栄華を讃える言葉としても用いられたと思われる。中宮・彰子も称賛し、以下の返歌をしたとされる。

九重に 匂ふをみれば 桜がり
重ねてきたる 春かと思ふ

新人女房として見事に和歌の才覚を披露し、道長も含め、その場に居合わせた宮中の人たちから絶賛された。



写真1 知足院ナラノヤエザクラ原木の桜

さて、この歌に出てくる桜は、返歌から分かるようにソメイヨシノのような一般的桜よりかなり遅咲きの桜で、その咲き誇る様を見て、宮中に春が二度来たみたいと詠んでいる。すなわち小ぶりな八重の花を咲かす山桜の変種、ナラノヤエザクラという一品種であったと言われている。その原木（写真1）が、大正11年に東大寺の塔頭知足院（写真2）の裏山で発見され、翌年国の天然記念物に指定された。奈良県の県木ともなっている。

知足院は、観光客で年中賑わう東大寺大仏殿表側の南大門方面でなく、裏側北方に位置する。正倉院の東側の道を挟んで向かい側の、木々が鬱蒼と生い茂る高台にひっそり本堂が佇んでおり、その付近では観光客は殆ど見かけない。我が家のルーツとも関わりがあり、明治大改修の勸進役をした曾祖父菅沼英樹（東大寺別当）が住職だったこともある。数年前までの住職は東大寺長老守屋弘齋氏であった。

故守屋氏は修二会（お水取り）最多参籠記録を持つ最も修二会に精通した方であった。“お水取り”は全国的にも知られた春先の季節行事で、二月堂の舞台を、大きなお松明をもって駆け巡る練行衆の姿が毎年ニュースに流れる。そのお水取りが終わる3月中旬過ぎま

では関西では本当の春は来ないと言われている。

知足院の本尊は地藏菩薩立像で、本堂は普段閉まっており、年に一度、7月24日の地藏会の時だけ、厨子に入った本尊が開帳される。朝8時に東大寺の各塔頭から集まった僧侶20名ほどが、本尊前に円陣を組んで座し、1時間余り読経を合唱する。



写真2 東大寺の塔頭知足院

終盤には一斉に立ち上がって声明（しょうみょう）を唱えながら本尊の周りをぐるぐると巡る、いわゆる行道（ぎょうどう）を行う。いにしえからの伝統を感じる、なかなか迫力ある法要である。

知足院の知足の由来は「吾唯知足」で、「我ただ足るを知る」と読む。「吾唯知足」は口の作りや偏が共通なので、真ん中の口の部分に水が入った手水鉢、茶室の前の“つくばい”として禅宗寺などで見かける。「少欲知足」などと同様、「足るを知るものは貧しいといえども富めり、足るを知らないものは富めりといえども貧し」という禅の精神を示す。欲というのは際限なく膨らむものなので、現状で満足することを覚えなさい。そうすれば心穏やかに毎日が過ごせるといった意識もできる。

確かに、少し金持ちになるとさらに金銭への執着欲が増し、権力を持つ立場になると人を服従させるためにさらなる権力・地位を欲しがらるようになりがちである。欲を持つ人々が競い合う結果、貧富や階級の差が生まれることになる。一方で、社会や国家レベルで人の欲を考えてみると必ずしも悪とはならない。

個人の欲望を抑え、社会全員への平等な利益分配を目指す計画経済の国々、旧ソ連など共産主義国は経済力が衰退し、反対に個人の所有欲や金銭欲を成長の原動力としてきた資本主義の国々の方が、生産力が高く、経済的に豊かという事実も否定できない。

話を個人レベルに戻すと、やはり「足るを知る」ことは、「満足感・幸福感」と密接に関係し、「分をわきまえ高望みしない」が大切と思われる。特にシニアは年相応に衰えたり失ったりするものが多いので、“ありのまま”の自己や現状を素直に受け入れる「諦念」と合わせて、生き方のコツのような気がする。「上を見ればキリがない、下を見ればアトがない」状況であったとしても（笑）。

若い時は、花見の季節を迎えても特別な感情が浮かぶことがなかったが、近年は、桜の花を愛でる気持ちが湧いてきた。厳しい冬の季節を耐え、ソメイヨシノが一斉に花を咲かせるのを見ると、老木でも年に一度、存在を誇示し世の人々を喜ばせる。それに我が身も做りたいと思う、今日この頃である。

（鹿児島大学教授）

[エッセイ]

『鳥瞰するキリスト教の歴史』を執筆して

岩城 聡

私が所属する日本聖公会というキリスト教団は、イングランド国教会およびそこから生まれたアメリカ聖公会の双方にルーツを持つキリスト教団で、明治20年に組織として創立され、ほぼ140年の歴史を持つ日本のキリスト教会では老舗に属する教会である。組織として整えられているため、定年退職制度がある。小生も70歳で定年を迎え、働いていた川口基督教会（大阪教区主教座聖堂）を出て、古巣の豊中の自宅に帰ってほぼ8年になる。ただサンデー毎日というわけではなく、毎日曜日には豊中や堺、富田林の教会で礼拝の司式・説教をし、週に一日は京都にある聖公会の神学校で教鞭をとっている。従って、結構忙しい。

その合間を縫って、今年の5月に『鳥瞰するキリスト教の歴史』という標題の入門書を出版した。A5版、およそ300ページ（1,800円＋税）の読みやすいサイズである。

執筆に要した時間は自分でも分からない。京都にある私たちの教派の小さな神学校「ウィリアムス神学館」で、小出しにしながら授業でも使用し、そのフィードバックも採り入れながら徐々に書き進めたからである。それでも、いざ書籍になってみると、不十分な点や誤植、重複などが目につき、自己採点では出来映えは70点ぐらいと考えている。もしも増刷の機会があれば、いくつか手を入れて完全なものに近づけたいと願っている。

本書の特徴は、「はじめに」で触れているよ

うに、「キリスト教についての鳥瞰図（鳥が空から眺めるように地上の全体図をつかむ）を提供することを目指している」点にある。それが世界を理解する一つの鍵となると考えているからだ。

過去2000年間のキリスト教は、変容と分裂と競争を繰り返しつつ世界中に展開していった。ところが、とくにロシア正教をはじめとする「東方教会」はこれまでの入門書では触れられることが少なく、ローマ・カトリックやプロテスタントなどの「西方教会」が多くの紙面を占めていた。本書では「東方教会」の展開にも、他の入門書に比べて多く記すことが出来たと思っている。特に、451年のカルケドン公会議で異端とされた「非カルケドン派」の諸教会（エジプトのコプト教会など）が東ローマ帝国の領域を超えてペルシャやインドにまで広まり、特徴ある教会を形成したこと、スラブ民族の形成に大きな影響を与えたキエフ・ルーシ（キエフはキーウと称されるように変更されたが、これまでの研究に従ってキエフと呼ぶことにした）に北欧のヴァイキングが関わっているとの記述などはこれまでのキリスト教史には余り見られないと思う。

また他宗教、ことにイスラム教との対立と戦争も激しいものであり、その最中での虐殺や略奪にも注意を払った。十字軍はその代表的な事例である。本書では、キリスト教の負の遺産からも目をそむけることなく、アフリカ大陸や南米大陸、またアジアでキリスト教が犯してきた構造的な罪にも触れた。これも一つの本書の特徴である。一方で、イエス・キリストの愛の教えを実践し、その中で命を献げた人々もいたことも事実である。肯定的な働きをしたキリスト教徒としては、南アフリカのツツ大主教、マザー・テレサ、エルサ

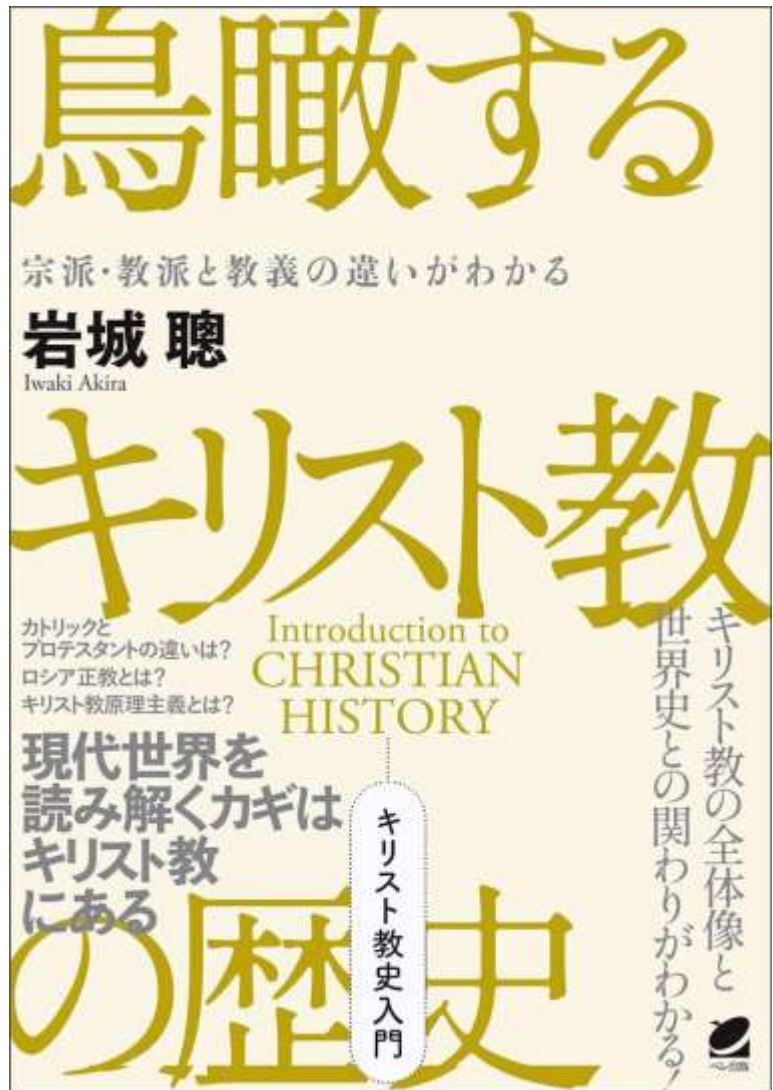
ルバドルのロメロ大主教、日本の中村哲医師に触れた。

本書に対する読者からの反応にも、意外なものがあった。一般にキリスト教関係の書籍は一般の大手書店の店頭には並ばないことが多いが、本書を大手書店の店頭で平積みになっているのを見つけたとの便りもいくつか寄せられた。ありがたいことである。また、とある刑務所の受刑者から、本書を読んで大変感銘を受けたので、キリスト教(特に日本聖公会)に入信したいとの便りが寄せられた。書籍による影響力はたいしたものだと我ながら驚いている。この方とは誠実に文通を続けていきたいと思っている。

以下に、本書の章立てに沿って内容を簡単に紹介したい。

第1章

キリスト教はどのように誕生したか…ここでは、ナザレのイエスが誕生する前夜のパレスチナの状況を簡単に紹介した後、歴史的存在としてのイエスはどの程度復元できるのかという聖書学の問いに触れている。イエスは歴史的に実在し、聖書の記述はすべて事実であるという立場(ファンダメンタリズム)もあれば、イエス・キリストの物語はすべて虚



鳥瞰するキリスト教の歴史 ISBN 978-4-86064-764-3 四六判 295 ページ

構であるという立場もある。本書はそのどちらからも距離を置き、「聖書には歴史的出来事の痕跡や記憶が含まれている」という立場をとっている。その後、「キリストの復活」という「出来事」によって促されてさまざまな性格をもつ教会が各地に形成されるまでを第1章は描いている。生まれたばかりのキリスト教は、はじめはユダヤ教の分派と見なされ、ユダヤ教のシナゴグ(会堂)で礼拝を持っていた場合もあったが、1世紀末になるとユ

ダヤ教からは「ナザレ派の異端」というレッテルを貼られ、ユダヤ教とローマ帝国からの弾圧が始まる。

第2章

新約聖書と古代キリスト教会…第2章では、キリスト教の基礎である「聖書（旧約聖書と新約聖書）」の成り立ちについて説明し、それらが「正典」として固定化されるまでのいきさつについても触れている。仏典と異なり、聖書は4世紀頃に旧約聖書39文書、新約聖書27文書が確定され、それよりも追加したり削除したりすることができない。いわば閉じられた文書である。あとは、その解釈によってさまざまな多様性が生まれる。そして、聖書が確定する頃、313年にミラノの勅令によってローマ帝国によって公認され、392年にはローマ帝国の国教と定められる。一方、帝国の宗教となったキリスト教は、多様性を失い、ニカイア公会議など一連の公会議によって「三一神論（三位一体論）」などの正統教理を確立すると共に、そこから外れる教理を「異端」として排斥するようになる。

第3章

ヨーロッパ世界の形成…本章では、ゲルマン民族による西ヨーロッパ帝国の解体と、生き残った東ローマ帝国の動向に注意を払う。特に東ローマ帝国（ビザンティン帝国）におけるキリスト教の特徴を「皇帝教皇主義」と「イコン」「典礼」の面からまとめている。また西方においては解体された西ローマ帝国のあとに形成されたフランク王国とその発展形としての神聖ローマ帝国の動向と特徴を追っている。さらに、その社会の中で大きな役割を果たした修道院とその改革について触れている。また、西ヨーロッパの周辺部イングラ

ンドと北欧ヴァイキングの歩みを概観している。

第4章

東方正教会（イースタン・オーソドックス）の展開…第4章では、日本人に余り馴染みのない東方正教会の展開について概観している。そこでは、キエフ・ルーシとスラブ民族の誕生が鍵である。さらに正教の発祥の地コンスタンティノポリスがオスマンの攻撃の前に陥落し、ビザンティン帝国が滅亡した後に、正教の中心地がキエフからモスクワに移り、第三のローマと呼ばれるにいたった経緯を記している。さらに、スラブ諸民族における正教会の形成についても触れている。

本章のハイライトは、ローマ教皇の首位性を認めつつ、東方典礼を守り続ける「東方典礼カトリック」「ギリシア・カトリック」の形成である。筆者が2019年にウクライナを訪問した際に、西部の都市リヴィウで数多く見かけ、礼拝ものぞき見た。16世紀に当時ルテニアと呼ばれていたポーランド・リトアニア連合王国支配下の地で、ローマ・カトリックと当地の正教会の間で合意が成立し、東方典礼カトリック教会が生まれることとなった。ウクライナを始め、東欧には有力な教会として現在でも存在し、現在のロシアとウクライナの戦争の背後には、一つにはこの教会の存在があると考えられる。

第5章

イスラムの勃興と東西教会の分裂…この章では、7世紀から始まるイスラムの勃興と、それに対するキリスト教会の反撃に光を当てている。とくに、その中で生まれた「十字軍」の活動を特記している。西方教会から派遣された十字軍は、聖地エルサレム奪回を旗印に

しているわけだが、実際は各地での略奪を繰り返してその強盜的性格を露わにした。特に第4回十字軍は本来の目的を大きく逸脱し、コンスタンティノポリスを占領して、「ラテン帝国」なるものを建て、ビザンティン帝国各地を略奪して回ったとんでもない代物であった。他方、東西文明の接触により、アラビア数字（それ以前、西ヨーロッパではローマ数字を用いていた）、ガラス技術など、西ヨーロッパに大きな利益がもたらされたことも否定できない。

第6章

ローマ・カトリック教会の発展と宗教改革前夜…本章ではローマ・カトリック教会が強大化すると共に世俗権力化し、それに対する対抗勢力が醸成されてくる状況を描いている。一つは神聖ローマ帝国の変質から国民国家が形成される過程であり、もう一つは宗教改革勢力の誕生である。ここでは、初期の宗教改革者としてイングランドのウィクリフとボヘミア（チェコ）のフスを取り上げている。

第7章

宗教改革の時代…第7章はいよいよ本格的な宗教改革によって、キリスト教世界がより一層多様化する過程を詳細に描いている。ルネサンスと人文主義を背景として、ドイツでマルティン・ルターが「95箇条の提題」を発表して、教皇をトップとするローマ・カトリックの誤謬・逸脱を糾弾する。それを受けてスイスでツウィングリ、カルヴァンがさらに徹底した改革を進め、北部ヨーロッパでいわゆる「プロテスタント」勢力が生まれる。ルターは決して新しい教会を始めようとしたわけではなく、「贖宥状（いわゆる免罪符）」を買うことによって罪が赦されるというカトリ

ックの教えを批判し、「信仰のみ」「聖書のみ」「（神の）恵みのみ」という原理を対置して、教会を改革しようとしたのである。

イングランドでは、ルターやカルヴァンの影響を受け止め、ヘンリー8世からエドワード6世の治下で宗教改革が始まる。指導者はトマス・克蘭マーである。祈祷書を中心とした独自の改革であったが、より徹底的な改革を目指すピューリタン（長老派や会衆派など）、大陸の宗教改革の影響を受けた勢力による対決姿勢が強まり、エリザベス1世の死後のスチュアート朝の時代には、ピューリタン革命が勃発し、国王は処刑され共和制が始まる。しかしこの共和制は短命に終わり、いわゆる王政復古、さらにはいわゆる名誉革命が起こり、イングランドの政治体制は目まぐるしい変化を遂げる。

キリスト教史的に重要なのは、このような歴史の大波の中でメソジスト、長老派、会衆派、バプテストなど、多くの「プロテスタント」諸教会が生まれ、世界の中に出ていくという事実である。さらに、本書では、トリエント公会議を中心としたローマ・カトリックにおける改革を取り上げている。その中で生まれた修道会「イエズス会」による海外伝道も重大な出来事である。イエズス会を先兵としたスペイン、ポルトガルによる植民地支配は世界に広がり、先住民のキリスト教化が進むが、その過程で血なまぐさい殺戮と文化破壊が起こったことは否定できない。本書ではドミニコ会のバルトロメ・デ・ラス・カサス司教が記した『インディアスの破壊についての簡潔な報告』の一部を紹介し、征服者たちの野蛮な行為を記している。

第8章

北アメリカ大陸におけるキリスト教の発展

…イングランドを中心とする大英大国の強大化に伴い、世界各地に英国（大英帝国）の植民地が拓かれた。特に重要なのが北米の植民地（東部13州）である。イングランドにおける宗教的抑圧から逃れたピューリタン（彼らはピルグリム・ファーザーズと呼ばれる）が拓いた北東部6州はイングランドによる支配を嫌い、ピューリタン独自の神権政治を実行したが、ニューヨークなど中部諸州はイングランド教会を含む諸教派の自由競争の場となった。ヴァージニアなど南部諸州ではイングランド教会が公定教会（established church）とされることが多く、裕福な有力者が教会を支えた。因みに、ジョージ・ワシントンはヴァージニア・アレクサンドリアの教会の信徒であった。

しかし、アメリカ独立戦争（アメリカ革命）が始まるとアメリカのイングランド教会はさまざまな特権を剥奪され、壊滅的打撃を受けた。そこで、独立後彼らは自らの主教を選出し、名称も「プロテスタント監督教会（The Protestant Episcopal Church）」と変更し、自由教会として再出発した。長老派やバプテスト教会、会衆派教会などのプロテスタント諸教会も大きく花開いた。

やがて、アメリカ合衆国が西部と南部に領土を拡大するにつれて、工業化をなしたとげた北部諸州と、奴隷制を基礎に綿花やその他の農産物によって経済の発展を支えていた南部諸州との矛盾が顕在化し、南部諸州は「アメリカ連合国」を結成して、「合衆国」からの離脱を図った。その結果いわゆる「南北戦争」という内戦が勃発した。北部の勝利と共に、南部諸州は合衆国に再編入され、アメリカ合衆国は国家としての一体性を強め、大国への道を歩み始めた。キリスト教の諸教派は多数の教派に分かれ、アメリカ独自の「福音派」

も誕生した。

第9章

宗教改革後のヨーロッパ…本章ではまず宗教改革後のフランスに焦点を当てて、啓蒙主義の出現、さらにフランス革命の経過と、ナポレオンの出現を概観した。また、ドイツについては三十年戦争について紙数を割くべきであったと反省している。本章ではいきなり19世紀の教会合同への動きを取り上げ、ドイツにおける「自由主義神学」の勃興に光を当てた。さらにそれとの関係で、二十世紀初頭の「ドイツ教会闘争」を詳しく取り上げた。台頭するナチスとの対決がキリスト教の重要な課題であると考えたからである。その中で生まれた「バルメン宣言」についてもコラムで触れている。

第10章

帝国主義時代のキリスト教…ここでいう「帝国主義時代」とは、列強による世界の分割がむき出しの形で繰り広げられた時代のことである。19世紀に入ると、スペイン、ポルトガルという植民地主義大国に加えて、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、オランダなどの列強が競って世界に覇を唱えるようになり、その動向にはキリスト教各派の「宣教」が切っても切れない関係を持っている。

それらの宣教活動の世界史的評価は、現代では深刻な悔い改めを伴って、180度の転換を遂げつつある。イギリスにおいては、インドの植民地化をはじめ中国に対する武力侵略（アヘン戦争）によって世界的な植民地主義大国としての地歩を確立する。アメリカもまた、北アメリカ大陸における領土拡張に飽き足らず、フィリピンなどの獲得に乗り出すのである。この過程においてアフリカ大陸に対する

経済的搾取だけでなく、人的搾取、つまり奴隷貿易が猖獗を極めたことも取り上げている。

さらに本章では、植民地主義的宣教の結果として生まれたアフリカおよびインドのキリスト教、韓国のキリスト教について触れている。特に韓国においては、非キリスト教国である日本による植民地的支配の下で、キリスト教会が抵抗の場として機能した状況を明らかにしている。

第11章

宣教のパラダイム転換と教会一致運動…本章では、第一に従来の植民地主義的宣教論に対する反省から、「宣教のパラダイム転換」といわれる事態が起こり、「神の宣教」という新しい宣教論に基づく宣教論が発展してゆく状況について叙述している。第二に、その結果としてローマ・カトリック、東方正教会、プロテスタント諸教会の間に交流と協力が発展し、教会一致運動（エキュメニカル運動）が生まれる様子を概観している。

第12章

キリスト教とは何か…最終章に当たる本章では、キリスト教とは何かという直接的な問いを避け（なぜなら、そうした限定によってキリスト教の姿が切り縮められるから）、むしろ「キリスト教は何でないか」という問いから記述を起こしている。その問いは最初にイスラエル国家によるパレスチナ侵略と植民地化に出会う。イスラエルは「ユダヤ人国家」と自己規定しており、決してキリスト教国ではないが、自国のパレスチナ（ことにガザ地区）における軍事占領と植民地化を旧約聖書の記述の一部を恣意的に引用して正当化しているため、日本においてはキリスト教寄りとみられる傾向にある。また、アメリカの福音

派やヨーロッパの教会の一部が、かつてナチスが「ホロコースト」という大量虐殺を行った事実に対する罪悪感からイスラエルに対する支持を続けるという事態が生まれている。本書は、イスラエルによる聖書引用がいかにかの外的外れであるか、世界に広がるユダヤ教共同体のラビたちがイスラエル国の指導者たち（シオニスト）を糾弾している状況を紹介し、それに対する否定からキリスト教のあるべき姿を描き出そうとしている。

最後に本書は、「おわりに」の一文で全体を締めくくっている。ロシアによるウクライナ侵略によって、キリスト教に対する疑問符が大きくなる中で、キリスト教の歴史の負の遺産が意識されるようになってきているが、一方、貧困、民族差別、病気、戦争、流民化、階級対立、性差別などで困窮する人々に奉仕し、その解放のために尽力したキリスト者も大勢いることを本書は指摘している。本文中でも宗教改革者、ドイツ教会闘争におけるバルトやボンヘッフアー、日本の植民地支配に抵抗して殺された柳寛順、解放の神学を実践したキリスト者などについて紹介し、「おわりに」でも、幾人かの「聖人」と呼ばれてもよい人物について触れている。

ある研究者によれば、古代において迫害が強まり、疫病が流行した後にキリスト教が大きく成長しているという。それは、人々に奉仕するイエス・キリストの精神がはっきりと体現されており、当時の人々の心を捉えたからであろう。現代においても、キリスト教が脈々と引き継がれている本来の姿を取り戻すことを期待しつつ、また、キリスト者の一人としてそのために残る命を献げることを心の内に密かに誓いつつ、本書の紹介としたい。

（日本聖公会大阪教区退職司祭）

[エッセイ]

都市景観のルネサンス

—フィレンツェからパリへ

山崎正史

私は建築学科を卒業し、町なみ保存や都市景観保存をやってきた。

大学に勤めていると外国へ行かせていただく機会がある。1998年から1999年にかけて、ヨーロッパの景観保全の制度と歴史を調べるつもりで、パリ、フィレンツェ、ロンドンへ勉強に行った。パリへは1998年の夏から年末にかけて、コレージュ・ド・フランスで勉学をした。パリで得た歴史の内容と、次に訪れたフィレンツェで得た内容が不思議に上手につながって、興味深い結果が浮かびあがった。ルネサンス期の「景観」という概念の始まりとその発展である。ルネサンスというのは、建築様式の復興だけではなく、都市景観の復興でもあったのである。この私の理解を、歴史的検証を加えて書いてみたい。

ローマ時代の都市的デザイン

はじめに、ローマ時代の都市景観というものを見ておきたい。ルネサンスとはそれを復興するというものだからである。

ローマ時代にイタリアはヨーロッパを席捲した。ローマは長らく共和制の国だった。ローマは7つの丘のある場所に自然発生的に広がった街だった。迷路の集まりのように我々には見える。帝政になるのはシーザーの後のアウグストゥスが出現する紀元1世紀のことである。その後も王政が続き、王はみな別々に自分のフォルムをつくった。フォルムというのは公共広場のことで、フォーラムという

言葉で現在に意味が残っている。場所はフォロ・ロマーノ、ローマの中心地である。フォルムは一本の軸線の上に、公衆浴場、図書館や裁判所の機能をもつフォルム、さらに神殿などが一列に左右対称に建てられた。整然と並び、都市を規制する態度がはっきりしていた(図1)。



図1 フォロ・ロマーノ

ウフィツィ宮殿—ヴェッキオ宮殿—サンタ・マリア・デル・フィオーレ教会の線

フィレンツェへ居を移した私は多くの観光客同様に先ずウフィツィ美術館へ向かった。その隣にあるヴェッキオ宮殿の前にミケランジェロ作(今はレプリカ)があり、そこから道の両側にウフィツィ美術館が長く続いている。突き当りは吹きさらしでアルノ川に開いている。初めて気が付いたが、内部の部屋は大きさも形もまちまちで、それが建物の背部に様々な形で突き出している。外観と建物の形に差異があったのだ。二階にあがり、一周して川に面した部分の上階から見返すと、建物の線が遠くで小さくなる透視図のような風景である。その先にヴェッキオ宮殿の壁面があるのだが、その時それがサンタマリア・デル・フィオーレ教会のクーポラ(丸天井)に向かっているように思われた。

フィレンツェはローマ時代の建設で、東西南北、碁盤上の都市道路が建設されていた。

中世末に、フィレンツェではその碁盤状の都市の東端に、サンタ・マリア・デル・フィオーレ教会を建設した。中世ではあったが設計者が分かっている、アルノルフォ・ディ・カンピオである。石造の建築の設計者は彫刻家でもあるのが普通であった。サンタマリア・デル・フィオーレ教会の設計時期は1296年と推定されている。その3年後の1299年に、ヴェッキオ宮殿が建設された。設計者は同じ人で、彼は余程その力量を信頼されていたようである。ヴェッキオ宮殿とはいふけれど、その機能は複数の貴族が合議して都市の運営を決める場所であった。市役所的な建物であった。都市国家フィレンツェもまた共和国だったのである。

その両者は同じ建築の設計だったのだ。二つを地図上で見た時、案の状の位置関係であった。ヴェッキオ宮殿の向きが微妙に斜めで、ローマ時代の碁盤上の都市の方向からずれている。これはアルノ川の方に合わせたからと思われる。アルノ川に直行に近い角度で配置されている。

今度はヴェッキオ宮殿の正面側、西側の壁面に着目して、その方向に線を引き、延ばしてみると、それがきちんと同教会の後ろよりに位置する大ドーム (cupola: クーポラ) の中心に向かっている。サンタ・マリア・デル・フィオーレ教会は司教がいる教会で、町でひととき大きく、こういった教会をイタリアではドゥオモと呼んでいる。

都市を代表する二つの建築が、同じ建築家によって設計されていること、それらが地図上で特別な関係をつくっていること。両者は意図的に関係づけられていたと推察させる。ところでこれが建設された時代は日本では鎌倉時代の終わり頃のことである (図2)。

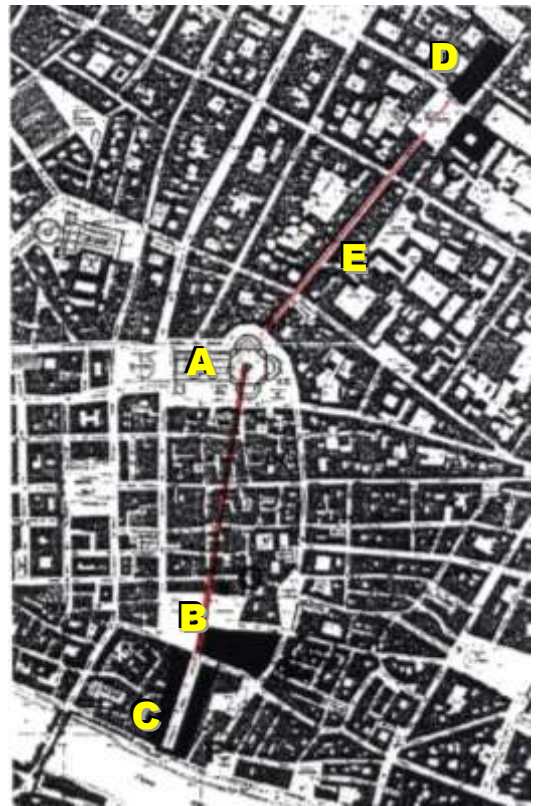


図2

A: ドゥオモ (サンタ・マリア・デル・フィオーレ教会)、
B: ヴェッキオ宮殿、C: ウフィツィ宮殿、
D: サンティッシマ・アッヌンツィアータ教会、
E: セルヴィ通り、それらに関連付ける都市軸。

ブルネレスキの「捨て子養育院」とアッヌンツィアータ教会

建築界でルネサンスを始めた人物として、建築家フィリッポ・ブルネレスキ (1377~1446) の名は非常に有名である。彼はサンタ・マリア・デル・フィオーレ教会のクーポラ (丸屋根) の設計コンペで一位となり、それを実現したことで有名になった。

「透視画法」を数学的に解明したのもブルネレスキと言われている。透視画の解明は大きな出来事で、当時は出来事しか絵の題材にはならなかったが、出来事の背景に都市の透視画が描かれるようになった。

ブルネレスキがサンタマリア・デル・フィ



図3 ブルネレスキ作「捨て子養育院」(1419年設計)

オーレ教会のクーポラの次に実現したのが「捨て子養育院」(1436)という建築物である(図3)。これは建物の正面を半円形のアーチをもつ回廊で飾ったものだ。ローマ建築と言っても、当時はまだ有名ではなく、発掘もほとんどおこなわれていなかったようだ。町の中に、古い建築の上部を望むことができる程度だった。そのころはゴシック建築の時代で、先がとがったアーチが流行っていたが、ローマ建築にはそういう形がいっさいなかった。ローマで勉強したものを手に、彼はフィレンツェへ戻ってきた。そこで彼にやってきた「捨て子養育院」の設計の仕事に、その前面をローマで手にした半円形のアーチを用い、建物全体をローマ風に仕上げた。これこそがブルネサンスの最初の人と言われる由縁だろう。

さて、その位置が、フィレンツェのドゥオモのクーポラから北東の方向にあるサンティッシマ・アッヌンツィアータ教会(聖復活教会)の前隣であった。当時は都市の外で、周囲はまだ畑だっただろう。それへつながる道はクーポラへと向かう、セルヴィ通りである。セルヴィ通りはドゥオモのクーポラから外に突き出した部分(礼拝堂)の一つの壁にまっすぐに突き当たる。町の北東部で他の道はドゥオモに行き当たりさえしない。これもカンビオが考えた都市デザインであったのかもし



図4 このように透視画法的に見るのが正しい見方だろう

れない。

アッヌンツィアータ教会の前で、ブルネレスキは捨て子養育院をセルヴィ通りから後退して建設した。これは反対側にも同じように道から後退した建物を期待して、教会の前に整形の広場を建設する意図であったからと言われている。「捨て子養育院」はその外壁面に特別な場所をもっていない。同じデザインのアーチと水平線が横に並ぶばかりである。これは広場正面の教会を見たときに、透視画法的に斜めに見られることを意識したデザインであったと見るべきように思われる(図4)。

その建設からおおよそ100年後に向かいの建築が通りから同じように後退して建てられた。またそれから約100年後に教会の正面が「捨



図5 サンティッシマ・アッヌンツィアータ広場。右手に捨て子養育院、左手にそれから100年後に道路から後退して建設された建物。さらに後に改変された教会のファサード(正面)。約200年かけて広場のデザインが完成した。広場の中央には都市デザインに関心の強かったコジモ1世の像がある。

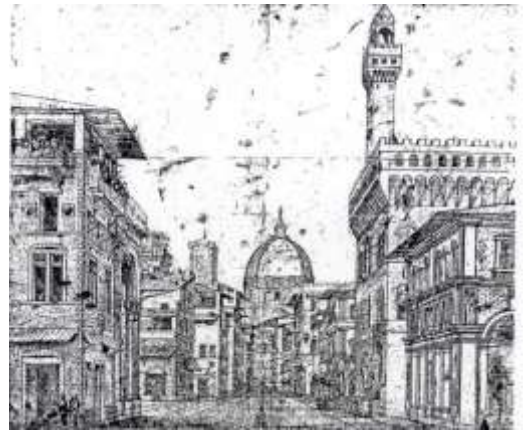


図6(左) ドゥオモ(サンタ・マリア・デル・フィオーレ教会)とヴェッキオ宮殿。
図7(中) 手前のウフィツィ宮殿(美術館)。透視画法の線を描くまっすぐな軒線のある街路は理想的な都市景観だった。
図8(右) 舞台画 ランチ作。ヴェッキオ宮殿(右)の向こう、広場の角に建つ建物がウグッチオーネ邸。

て子養育院」と同じようなアーチのならばデザインで修復された。こうして3方を連続する半円アーチで囲まれた整形の広場が200年かけて、ブルネレスキの意図のしたらしい形に完成されたのだった(図5)。

コジモ I 世の登場

1537年、最初のフィレンツェ公となったアレッシンドロ・ディ・メディチが暗殺されるという事件がおきた。メディチ家が途絶えたかと思われたときに、その息子が隠されて育てられており、公の前に出現したのだった。コジモ I 世(1519~74)となった彼はその息子だったのである。

彼が選んだのは、都市の景観をつくり出すことだった。それ以前に都市景観という概念はなかっただろう。ヴァザーリ^(注1)という人物が建築家として選ばれた。彼との相談のなかで都市景観の設計が出現したのかは分からない。都市景観、それは堂々たる道の両側に同じ高さの建築がならび、透視画法の線を実際の景観として目に見える形でみせる、というものだった。ローマの皇帝たちは都市的規模で、都市の軸線を実現していたが、それは

建築物で視線を途切れさせていた。それを建築物で途切れさせず、伸びる軸線を続けさせること、そうしてこそ透視画法的な姿が浮かびあがる。それがここでの眼目だったのではないか。

1560年に、ウフィツィ宮殿(今の美術館)の建設が始まった。場所はヴェッキオ宮殿の前からアルノ川へ至る間(図6)。建物を構成する部屋は大小いろいろであったが、それらの前面に連続する大きな壁が作られた。背後へまわると建物にはいろいろな部屋があり、凸凹しているのがわかる。建物が正面側の壁のデザインにあったことが分かる。巨大なU字形をなす宮殿はアルノ川側で1階が吹き放ちで川に向けて開いている。反対にヴェッキオ宮殿側では建物がない。人はここで、先ずぼまりの透視画法の線の実現をまのあたりにする(図7)。

ウフィツィ宮殿からドゥオモのクーポラへ

ヴェッキオ宮殿の正面壁面の線がドゥオモの大ドームへ向かっている、という考えに着目した人物がいた。ある日、私はそれを見つけたのである。ある戯曲の背景のために描か



図9 セルヴィ通り
正面にサンティッシマ・アッヌンツィアータ教会。両側の建物の軒線が透視図的に遠くですばまる。

れた、バルダッサレ・ランチ作の絵である(図8)。そこに、ヴェッキオ宮殿の前に広がる広場から北方向のドゥオモのクーポラへ向かう道が描かれているのである。道のいきつくところの上にドゥオモのクーポラの頂上が見えている。この絵の手前には、道の広場の右角に立派な付け柱のある建物が描かれている。これはウグッチオーニ家の建物で、今もヴェッキオ広場の北面のほぼ中央に建っていて、実際に見ることができる。

これをその位置に建設するように命じたのはメディチ家のコジモI世だったのだ。コジモI世はヴェッキオ宮殿とドゥオモの丸屋根(クーポラ)を結ぶ道の建設を計画し、ウグッチオーニ家の建物を彼の計画した道の邪魔にならないように、今の位置に建てさせたという記録が残っている。この道は実現しなかったが、ランチの絵はその企画案のおおよその姿を描いたものだった。アルノルフォ・カンビオの考え、ヴェッキオ宮殿とドゥオモを結ぶという考えは、ほぼ2世紀の後に実現へ向けて再び構想されたものだった。

さらにその頃に描かれたセルヴィ通りの絵がある。セルヴィ通りというのは先述したサンティッシマ・アッヌンツィアータ教会の正面の道である。その両側に同じような形と高さをもつ建築が続いている(図9)。ウフィツィ宮殿で実現されたのと同様の風景が、ここでも都市の景観として実現している。透視画

法の都市風景としての実現である。我々はこの都市風景にひとつの理想形、一つの夢が持ち込まれたことを確認しなくてはならないだろう。

我々は、〈ドゥオモのクーポラ〉-〈ヴェッキオ宮殿〉-〈ウフィツィ宮殿〉という都市の軸線ともいえるものが、ローマ時代以来のながい空白の後に形成されたことを記憶にとどめなくてはならない。それにセルヴィ通りの軸線も加えるべきなのだろう。それらが目に見える形で実現されたのであった。

建築と庭園の関連付け—ピッティ宮殿

今度はメディチ家のピッティ宮殿と、ここでの都市デザインの展開について述べたいと思う。

フィレンツェはアルノ川で南北に切られている。ウフィツィ宮殿から有名なポンテ・ヴェッキオ橋でアルノ川を越え、その道をしばらく行くとピッティ宮殿がある。ピッティ家がメディチ家に負けじと作ったものであったが後に衰え、16世紀中ごろ、メディチ家のコジモI世によって、彼の妻のために買い取られた。宮殿の改修と、それと呼応した庭園デザインの改修が命じられた^(注2)。建築全体がコの字型になるように両端を曲げ、庭園側はこれに対応して馬蹄形の庭園にするというものであった。馬蹄形は中央が低くつくられた。劇建築と庭園(外部空間)の共同設計という



図10 改修後のピッティ宮殿
建物がコの字型になっていることと、背馬蹄形庭園になっている。

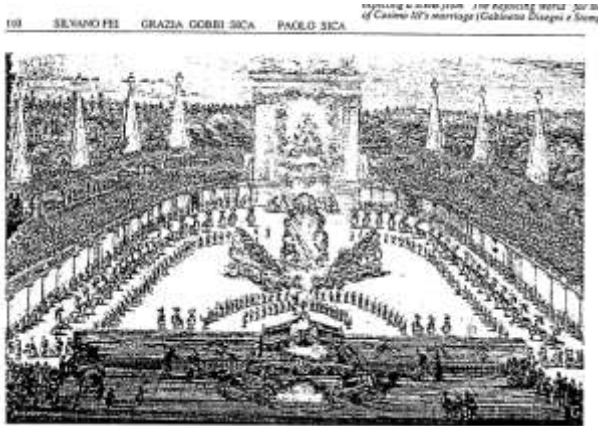


図11 ピッティ宮の庭園
マリーの結婚を祝し、馬蹄形の部分に観客席をつくり、手前に舞台をつくって歴史上初めてのオペラが上演された。

のは、二つを共有する軸線で結びというものだった。建築と庭園を関係づけた最初であった。施主はコジモ I 世だったことも忘れずにおきたい(図10)。これらは後の時代の都市デザインの基本的な要素となるものだった。

コジモ I 世には孫娘がいた。彼女が、後述するパリのアンリ IV 世へと嫁ぎ、フィレンツェの文明を伝えたマリー・ド・メディシスだった。コジモ I 世の都市デザインへの興味を引き継いだ女性だったと思われる。当時のパリは文明が遅れていて、食事用のナイフとフォークやその他もろもろの文明の証しと言えるものをパリへ持ち込んだ女性であった。

さて彼女の結婚を祝す会は特別なものだった。場所は彼女が育ったピッティ宮殿だった。ピッティ宮の馬蹄型庭園を劇場にして、斜面を人で埋め、祝祭のためにその中央で史上最初の歌劇(オペラ)が行われたと言われている。

る。1600年のことである。当時文明の先端であったフィレンツェでは、音楽劇も発達していた。これは劇のなかに楽曲をとり入れたものだったが、全部を音楽にするもの、すなわち歌劇(オペラ)ではなかった。ここで歌劇が作り出されたのは彼女の結婚の式典が行われたからだったのだ(図11)。

彼女とともに、都市景観という新しい概念がフィレンツェからパリへと伝えられた。その事情については本論の後半部として書きたいと考えている。

(立命館大学名誉教授)

注1: ジョルジオ・ヴァザーリ(1511~1574)。ルネサンスの芸術家について記した『画家・彫刻家・建築家列伝』の著者。サンタ・マリア・デル・フィオーレ教会クーポラの内側の絵も彼の作である。

注2: 建物の改修はバルトロメオ・アンマナーティ、庭の改修はトリボロという芸術家が行ったとされる。共にミケランジェロの弟子という。

[エッセイ]

東京探訪記(19)

“山の手”の風景②： 赤坂

四元秀毅

日本は自然災害の多い国で、昔から人々はいろいろ備えをしてきたがしばしば思わぬ災難に見舞われた。政治的な対策も大事で、江戸時代、幕府は飢饉の後などに各種改革を行い一定の成果をあげたものの抜本的な解決には至らなかった。現代にも通じる課題である。

前回、山の手としてまず“霞が関”を紹介した。今回はその西隣の“赤坂”をみてみたい。

幕臣などの居住地だった“赤坂”

“赤坂”(図1)は江戸城西側外濠の西南部を占める地域で、北・西・南で“四谷”、“青山”、“麻布”と接している。徳川家康(1543-1616)の入国前この辺りは畑作地だったが、開府後に武士の居住地になり、江戸の発展とともに外縁地域には町人も住むようになった。

“赤坂見附”(左上：〈8〉)は城の西南部の防御門で、その東南には松平家など徳川親藩の屋敷があり、勝海舟(1823-99)の住居〈5〉も見える。彼が下町“本所”(現在墨田区)生れだったことは本連載第12回で紹介した。幕末期にこの地に住居を得た彼は明治期も赤坂を住居とし、そこは「氷川神社」〈2〉に近かったので彼の談話集は「氷川清話」と命名された(江藤淳、松浦玲編；講談社学術文庫2000)。

海舟は明治期に政府要請で海軍卿などの公務を務めご意見番役もはたしたが、日清戦争(1894-95)の際には朝野こぞって好戦気分には舞い上るなか断固これに反対の立場をとった。当時彼が詠んだのが次の漢文詩である。

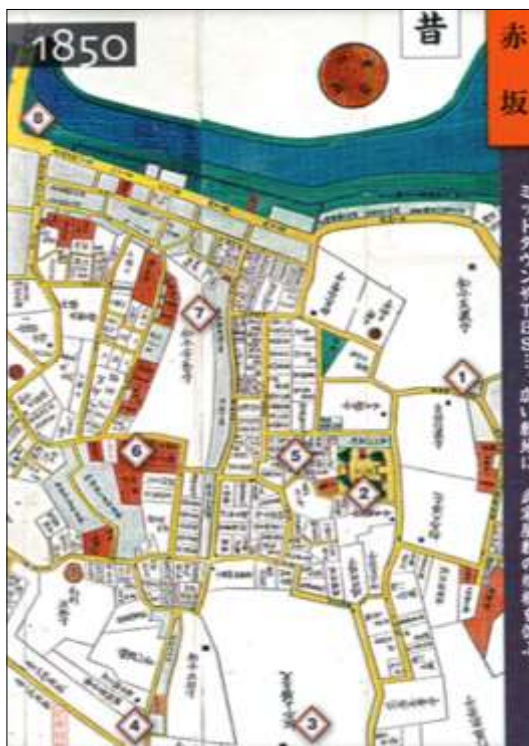


図1 幕末期の“赤坂”

上方の“外濠”の左端は“赤坂御門”に付属する“赤坂見附”〈8〉で、「見附」は城門の見張り場を意味する。その左は“弁慶橋”で、右方に松平家の広大な屋敷があり、中央右の〈2〉は“氷川神社”、その左方の〈5〉は勝海舟の住居である(上方が北；江戸楽編集部「古地図で歩く江戸・東京；メイツ出版株(東京)2018年に依る)。

隣国交兵日(りんごくへいをまじうるのひ)
其戦更無名(そのいくささらにななし)
可憐鶏林肉(あわれむべしけいりんのにく)
割以与魯英(さきてもってろえいにあとう)

実に適確な歴史認識だった。彼のように広い視野と適切な視点を持つ人材に乏しかったわが国は、怪しげな史観にまみれ半世紀後に奈落の底に沈む。

“赤坂”の名の由来とその区名の変遷

“赤坂”の地名は、赤坂見附から北の四ツ谷へ昇る“紀伊国坂”が「茜坂」と呼ばれたことに由来するなどとされる。〈8〉の位置の違いでわかるように新旧図間では横方向にズレがあ

り現状図では江戸時代の図より左の西側地域も示されているが、上端中央やや左の道がそれである(左の○は迎賓館)(図2)。右方の草色域は徳川親藩屋敷などの跡地で現在は千代田区に属しており、そこには東京都立日比谷高等学校(旧東京府立第一中学校)★もある。同校は昭和初期に東の“日比谷”から永田町のこの地に移転している。地形的には東隣りの国会議事堂が高台にあるのに対してここはより低地である。

現在、赤坂は会社や商業施設の多い地域で港区に属しているが、東京府・東京市(後に東京都)の時代、ここは赤坂區だった。1878(明治11)年～1947(昭和22)年の東京が15区・35区だった頃のことで、同區は現在の港区と渋谷区の一部を占めていた。戦後、一帯は南の麻布區などと合併して港区になった。

“赤坂”の東側にあった“日比谷入江”

江戸時代初頭の江戸城周辺の地形図(図3)には、城の東南部に“日比谷入江”がみえる。城は本連載第17回で示した“四谷・麴町台地”上にあり、その周辺域は西側の“山の手”を除いて低地である。左下の標高値枠横の日比谷高校★辺りが低地の西北端だが、その東側に入り江が入り込んでいたのである。現在の丸の内(千代田区)から新橋(港区)の一帯は浅瀬の海で、東の銀座(中央区)辺りは砂が堆積して出来た半島だった。幕府は慶長8(1603)年の開府後に全国の大名に外濠の開削と天守台の修築を命じたが(天下普請)、入江の埋め立て工事はそれ以前の16世紀末に着手されている。

今回は“霞が関”の西の“赤坂”を紹介した。次回はその西の“新宿”などをみてみたい。
(国立病院機構東京病院名誉院長)



図2 現代の“赤坂”

中央と左上の部分は港区に、右上方の緑色部分は千代田区に属している(出典は図1と同じ)。

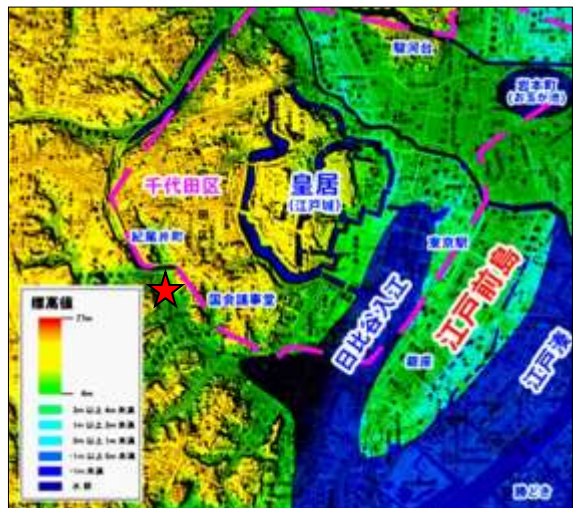


図3 江戸時代初頭期の江戸城周辺の地形図

“江戸城(中央)”は台地の上にあるがその南東側には“日比谷入江”が侵入しており、東には“江戸前島”という砂州の半島があった(ピンク色枠は千代田区; INDX 東京都心3区の地形の変遷; 原図は国土地理院<インターネット情報>)。

[エッセイ]

わが音楽人生 其の5

“アンドレアの囁き”

荒井雅至

2020年夏過ぎから私は東京・銀座日本弦楽器所有、1650年イタリアクレモナ作の銘器ガルネリ家の始祖アンドレアの貸与を受け、その翌年から併せてヴァイオリン Bow (弓) の最高峰、1800年代パリ、ニコラ・トルテ作による演奏ができるという夢のような時間を過ごしている。以前私は京都健康管理研究会の巨星・故泉 孝英名誉理事長との出会いにより、ヴァイオリニストが書くエッセイという“ステージ”を与えられ、健康塾通信第20号への寄稿エッセイ『わが音楽人生』のタイトルで既に其の4まで掲載されている。そして2023年春、泉先生ご逝去の際、また2024年3月30日開催、京都ホテルオークラでの泉 孝英先生を忍ぶ会に於いて、ガルネリ・トルテによる私自身生涯の研究テーマである J.S. バッハ無伴奏 vl. パルティータ「シャコンヌ」を献奏させて頂け(写真1)、併せて追悼集寄稿文『偶然と必然性のこと』でこれまでの感謝の思いを述べさせて頂けたのである。

A. ガルネリとの出会い、そしてその経緯

2015年3月に長年レッスン指導をしてきた国立音楽大学及び東京学芸大学を定年退職、2015年の夏過ぎに私が30年以上良い関係を続けている、我が国のアマチュアオーケストラとしてトップクラスと判断する静岡フィルに同行して2回目となるアメリカ演奏旅行から帰国直後、新聞記事等々でかなり大きな事件として取り上げられた楽器盗難・詐欺事件



写真1 泉 孝英先生を忍ぶ会で演奏

写真2 ガルネリの鑑定証と
N.トルテのオリジナルのフロッグ(弓元の毛箱)



に私も巻き込まれていたのがあった。此の事件により結成された被害者の会で同じ被害者の一人、日本弦楽器の佐藤輝彦氏と出会った

事が後の A.グアルネリ（写真2）貸与につながる訳である。

この年の12月に立ち上げられた“信濃毎日新聞長野本社ロビーコンサート”第1回公演『荒井雅至バッハ無伴奏ヴァイオリンソナタの夕べ』を終了し、帰京後 JR 高田馬場駅ホーム内の乗換階段下で酔客を避けようとした際、不慮の事故により私は左手中指第一関節の腱切断と言う大変な悲劇に遭遇した。救急病院での処置後、半年以上患部をギブスで固定し、事故から10ヶ月間近く全く楽器を弾けない時期を過ごした。その間、山歩きをして足腰の健康維持を図るなどの一方、ギブスを外した後は左手中指に負担をかけない奏法を試みる等々、如何に身体の各部に掛かる負担を軽減するかの奏法を目指した。これが現在、私が各地で催している初心者向けのヴァイオリン講座への“キャッチコピー”『ヴァイオリンを弾いて健康になろう』のワードに繋がる事となる。

～研究発表として～ ”わが国のヴァイオリン奏法としてそのメソッドへの新提案”

今回はこの銘器 A.グアルネリの弾き込みにより、これまでの半世紀以上に及ぶ私のヴァイオリン人生において音楽的、また技術的な部分を含め今までどうしても超えられなかった事の謎解きを、衝撃的かつ不思議な4年間における研究成果（イノベーション）として健康塾通信をお読みの皆様、またヴァイオリンを弾いてより美しい歌を奏でたいと願われる多くのヴァイオリニストの皆様にお読み頂き参考にして頂ければと願っている。

すぐには心を開いてくれなかったアンドレア

2020年1月に発生したコロナ禍にまきこまれ、世界中の演奏家、アーティストたちはこれ以

降表現するステージを全て奪われた。一方、コンサートだけでなく私共のレッスン指導も中止や無期延期となってしまった。語弊があるかもしれないが、逆にこの時期であったからこそ連日アンドレアの弾き込みに明け暮れる事が出来たとも言える。また私は此の時期を利用し、コロナ禍明けを見据えて“無伴奏小品集”~Adapted a composition : COVID-19 Pandemic variation~のレパートリー作りを含めて数年間、試行錯誤を続けたのである。

アンドレアを弾き始めて1年過ぎた頃に、名弓 N.トルテの貸与を受けた事から銘器アンドレアの響きに大きな変化が表れてきた。それまで単純に凄いとはいいつつも私の技術ではこれ以上望むことは無理なのかと悲観的な思いも感じ始めていた頃であったが、それがみるみるうちにレガート（なめらかさ）で落ち着きのある音色に変わって行ったのである。別な言い回しをするならば精神的に素直な気持ちでグアルネリ・トルテに対して全てを委ねた事からの成果とも言える。ここから少し角度を変えて実際の体の使い方などを考えた時に、解かりやすいかと思う以下の情景を振り返ってみる。

一度演奏旅行の途中神戸を訪れた際に、北野異人館界隈の急な坂道で何と2度にわたり、もう少しで転倒し大怪我をしていたかも知れない状況下で、両手を守り自身のとっさの踏ん張りとはバランス感覚で転倒を免れた事がある。この時、背中には A.グアルネリを背負っていたのであった。タイトル・アンドレアの囁きとしてとても大切な項目の一つに足腰・両肩・背中、要するに“演奏には自分自身の体の筋肉利用が不可欠である”と言う事への確信である。上述の体験は正にこの項目を実証していると思う。そしてもう一つ上記に繋がる大切な項目であるが、実は私が50年以上

どうしても外せなかった楽器と左肩の間に挟み演奏を楽にするための“肩当パットの不要論”に無意識のうちにたどり着いたのである。元々私は左肘が外側に向かう奏法（脇を甘く懐を深く）を推奨しているのであるが、左方後ろに向かうその度合いを少し増すことにより、左の鎖骨が自然な形になる。また後に、名弓トルテ Bow の貸与から発見した右手親指腹の使い方により右の鎖骨も自然な形になる。これにより右肘の高さキープが可能になるのである。別な角度から言うと楽器を構えた時に先ず背中中の左右の肩甲骨の周りの筋肉を寄せ合う事から始める（今を時めくMLB ドジャースの大谷翔平選手のバッターボックスでの構えを彷彿させる）。

私はレッスン指導時何かある度にユーモアを交えて聖徳太子の御誓文をもじり、“荒井雅至7箇条の御誓文”として小学生から全ての世代のみなさんに覚えやすい口調で説明している。～首を楽にし肘高く、右手首は丸くせず頭の上でちょんまげを作る。指揮台に立った指揮者が構える両手の形。腕立て伏せや・逆立ちをするときの肩から手首を思い出す。決して力を抜くでなく何時でもパンチを繰り出せる心の準備を忘れずに。用意が出来たら深呼吸。そして最後にもう一度、心の中でニュートラル～。また時にはパロディ風に“福は内・肘は外”。

肩当てを使用している場合、両肩から腰へ関連している筋肉を使いにくくなり、折角のレガート奏法を妨げることになってしまう。但し此処で確認させて頂くが、上記で私が取り上げた事を既に実践されている奏者もおいでも知れないし、又、全てのヴァイオリニストにこれらの事が当てはまる訳ではないとの事は十分承知している。色々な種類の肩当てが研究され販売されている現在、此の私の

提案はかなり
の反発を受け
るかもしれない。人其々に
合うか合わないかという事を○×で決める事はナンセンスであろう。ただ年齢的に若い頃はどんな奏法でも演奏は可能であると思う。しかし今回、私がお話した



写真3 ニコロ・パガニーニ

かったことは、還暦を過ぎ、現在の私のように後期高齢を迎えた時期に、如何にして気負いのない自然なレガート Bowing（運弓）で、約14分半の「シャコンヌ」を弾ききれるか、との事を声を大にしたのである。

次に上述の肩当て不要論とも関連する事であるが、今回の新提案の最後として冒頭で衝撃的な事と記載したが、もう一つの特筆すべき項目は、Bowing においての右手親指腹の利用方法である。かつて2021年にトルテ Bow をお借りする時、所有者の日本弦楽器・佐藤氏が「ヨーロッパの昔の書物を見ているとこんな風に親指を上にして弾いている絵がありますよ…」と、挿絵を示して下さった事を思い出す（写真3）。銘器グアルネリ・デルジェス を愛用した超絶技巧、かの有名なニコロ・パガニーニが演奏している一枚の写真である（音楽之友社版・新しいヴァイオリン教本第4巻の見返しに掲載：昭和40年第1刷発行～昭和54年第11刷発行）。既に翻訳出版されているヴァイオリン奏法の教科書的な書物での説

明内容とは違う、また現在ユーチューブ等々で紹介、説明されている其々とも違う、これは私が力説する“アンドレアの囁き”として非常に説得力のある写真と理解している。

コロナ禍が落ち着いてきた此処2、3年間、ガアルネリ・トルテにより多種のステージを経験して来たが、其々の演奏会を終了する度に奏法的な研究を含めて常に“加筆修正”を試みている。全くの牛歩の歩みではあるが、しかし何か少しずつ穏やかな気持でコンサートに臨める自分の姿を感じられるようになってきた。これから先にまたどんな素晴らしい出会いにめぐり逢えるかを楽しみにしている。

不思議な事…続編 “私に届いたG.グァダニーニからの切なる叫び”

かつて健康塾通信第20号への寄稿エッセイ「わが音楽人生」内のウィーン留学時代の思い出で、クリスマス直前にとっても不思議な思いに駆られ、朝霧にけぶる白と黒のウィーン中央墓地を暫し1人で歩いた…こんな出だしで、ウィーンで体験した逸話“ブリーフマルケン（郵便切手）”を書いた。今回は新しく手に入れたヴァイオリン、G.グァダニーニ（写真4）が発した私へ届ける悲痛な叫びを掲載する。

ウィーン留学を終えて帰国した後であるが、1982年の正月明けに、私は紹介されてイタリア・コモ湖畔で制作された1780年作のジュゼッペ・グァダニーニと言う、脈々と続く名門系列の名工の作品を買うことになった。輸入元の楽器商が当時、赤坂山王にあったホテルニュージャパン内の一室にお店と工房を構えていたため、そこで楽器の調整などメンテナンスを依頼した。不思議な出来事～それは約束したメンテ完了予定日の数日前だったと思う。その日、1982年2月7日の朝、何故か妙



写真4 G.グァダニーニ

に調整依頼した楽器の仕上がり状況を確認したいと言う気持ちに駆られ、昼過ぎに楽器商の工房に直接電話をかけた。発注したメンテナンスは既に終了して、G.グァダニーニは演奏可能との返事であった。それこそルンルン気分でお店に出向き、調整を完了したグァダニーニのケースをしっかりと小脇に抱えて地下鉄を利用し帰宅した。そして運命の翌朝、2月8日朝のTVニュースに目を疑ったのである。何と赤坂のホテルニュージャパン上層階からの出火、明け方3時過ぎの火災発生のおびただしい煙と炎、駆けつけた無数の消防車などテレビの火災現場報道画面に釘付けになった。一呼吸後、もし昨日、楽器を取りに行っていなかったら…と、一瞬全身硬直する自分の姿があった。多分焼失は免れたとは思いますが、あのフロアは勿論消火の放水を被ったであろう。また、もし難を逃れた場合でも各機関の現場検証の為、当分の間、楽器との対面などそれは絶対に不可能であったろう…こんな事を考えながら前日の朝、私はグァダニーニからのテレパシー（精神感応）を通じて明らかに切迫した状況・叫びを感じ取ったに違いない。名器とそれを奏でる奏者との間には必ずや特別な繋がりがある。此の様に思わずにはいられないのであった。

（ヴァイオリニスト）

[エッセイ]

青春旅の思い出手帳(5)

僕の青春放浪記再開

岡村邦彦

僕は77歳の夏の終わりに大変な経験をした。酷暑の中でけっこう歩き回っていたせいだったのか、本当のところはわからないが、低ナトリウム血症と診断されて救急入院したのだ。肺炎も起こしており、僕は肺炎のせいでしょうののだと思っていたが、入院後も意識がぼんやりして、この世にいるとも思えなかったくらいだ。でも回復し、その秋には以前よりもずっと元気になって、相変わらず食べることにのみ無上の喜びを感じてはいるけど、若き頃の思い出を書いてみようという気持ちが再びでてきたのだ。

北欧をめざす僕

日本でも海外旅行が許されて、小田 実さんの「何でも見てやろう」や五木寛之さんの「青年は荒野をめざす」が読まれた時代、1971年に、僕は横浜から船に乗りソ連を通り北欧を目指した（レニングラードから男はスウェーデンに向かい、女性はウィーンを目指すことが多かった）。

北欧での思い出はすでに書いたから、ここでは書かないが、僕はよく歩き回り、多くの人たちと交流できた。僕の若き日の輝きのひとつであった。

ポルトガルからスペインを経て北アフリカのモロッコへ

モロッコでコレラが流行していると聞いたので、パリで予防接種をしなければいけなく

なった。当時、日本人の海外渡航は年1回、外貨持ち出し500ドルまでの制限があったので、懐が寂しいバックパッカーは飛行機には乗らないが、予防接種をどうすればいいか、エールフランスの事務所に行き、そこで教えてくれた病院へ行った。その病院ではエールフランスの制服を着た女性が予防接種の手続きを説明してくれた。

日本では接種は2度に分けてするが、パリでは1度で済ますのだった。パリでの滞在は短く、僕はモロッコへはスペインのアルジェシラスから北アフリカのスペイン領セウタを目指し、フェリーで渡るつもりだ。パリを出てポルトガルまで車で迂回して、スペインのマドリードに向かったのであった。昼間は暑かったのに夜汽車はとても冷えた。これが大陸性気候というのか。

マドリードでは夕方から闘牛があるという。闘牛場に入って見ていると、牛が興奮すればするほど哀れに思った。残酷なので闘牛場を途中で出てしまった。

マドリード市内をうつむき加減で歩いて居たら、横浜から船で一緒だった見覚えのある3姉妹が居るではないか。いちばん下の妹が僕を見つけると歓声を上げて駆け寄って来た。

そこで、夜に遊園地でも行こうかと約束して別れた。夜の遊園地はネオンでとても綺麗だった。柄にもなくおセンチになって上の姉さんに「こうして偶然にまた会えてとっても嬉しいよ。君は？」と言うと、彼女は「べつに」と言って横を向いた。そう言えば五木さんの小説の中での似た場面を思い出した。

主人公淳一郎が麻紀と別れる場面で、「日本から一緒だったけど、おセンチかも知れないがこうして別れるのが辛いように思う。でもまた会えたら嬉しいだろうと思う。君は？」。「べつに」。「そう言って麻紀はさっさと行って

しまった」。そんな場面
を思い出して苦笑した。
女ってやつはと僕は思
った。

マドリッドでモロッ
コ行きに備えて水筒と
サングラスを買って置
いた。明日はアフリカ
だ。フェリー乗り場の
あるアルジェシラスに
着く。ここからフェリ
ーでセウタに行き、そ
れから僕が行きたいタ
ンシエールを目指した。



写真1 マラケシュのバザール

モロッコにて

フェリーから降りた途端に人が集まって来る。旅人である僕を案内すると言うのだ。隣に居たアメリカ人は「オレはここに5年住んでいるんだ」と言って撃退していた。

僕は、取り敢えずカサブランカまで行こうと考えた。カサブランカには夜の10時に着いた。人々は去って、アレよアレよと思う間に僕ひとりになった。どうしようかと考えあぐねていると、僕の周りに、いつの間にかまた人々が集まってきて案内すると言う。2ドルで泊まれる宿があると言って僕の取合いを始めた。

こんな時、弱気だとダメだから一歩前に出て、自分からすすんで人の良さそうなヤツを選んだ。彼は妙な路地に僕を連れていきやがった。何事もなかったけど、宿泊場所は安いだけあって酷く汚い部屋だった。案内のオヤジが2ディラハムだと手を出す。僕は黙って1ディラハム渡す。凄い剣幕で怒鳴りやがった。僕は彼の手からその1ディラハムすら取ろうとしたら、ぶつぶつ言って出て行った。

受付の黒人のオヤジはニヤニヤと笑って見て居た。念の為、用心に戸の前に椅子と机でバリケードを作った。もう遅く着くのはごめん

だ。
翌日は少し早く出た。カサブランカから3時間ぐらいのサハラ砂漠の入り口にあるマラケシュへのバスは酷かった。ベンチみたいなシートに5人座るのだ。窓を閉めて置いてもだんだん開いていく。ドアなんかも開けばなしで砂と熱風で凄かった。ボンネットも無くてエンジンむき出しで走っている。バスが止まった所はバザールの前で、そこは兼高かおるの世界だった(写真1)。

僕は何故か興奮して、この街一番のグランドホテルに泊まることに決めた。朝食付き10ディラハム(1,050円)だ。真っ赤な制服を着た黒人のボーイが僕のリュックを持って部屋まで案内してくれた。バスタブまである。部屋まで絨毯が敷き詰めてあった。

マラケシュのバザールに繰り出した。革製品、麻に刺繍がしてある服、ボンゴみたいな楽器、そして何処かの村から来た現地人の踊り。異国情緒十二分だ。夕食は、やはりシシカバブ。奮発して野菜サラダとヨーグルトを



写真2 生意気盛りの子供達に空手を教える。



写真3 ホテルはタイル張りの床で、水を撒き、とても綺麗にして居たのにベッドには南京虫が無数にいた。

付けた。

翌日、僕は高級ホテルというものには、やっぱり落ち着けないので、バスターミナル横に沢山のホテルがあったので探す事にした。日本円で3ディラハム(315円ほど)のものが有った。

たのでそれにした。

街を歩くと子供達が寄って来て金をせびる。中には僕のポケットに手を入れたヤツも居た。とんでもないヤツだ。彼等は僕に「アメリカ人か?」と聞いてくる。空手の真似をしたら彼等の態度が変わった(写真2)。

僕を先頭に彼等は並ぶ。他の子供が金をせびりに来ると、「この方は空手の先生だぞ」と、他の子供等を追い散らす。コーラを買って

飲んで居たら残りを欲しいと言う。周りの子供達もじっと見ている。僕はやり切れなくなって一本ずつ買ってやった。

その夜、余りにも痒いので飛び起きた。パチンと電気を付けてベッドを見たら、何かバツと飛び散る。南京虫(トコジラミ)だ。1センチぐらいのもいる。それを潰したらシーツに血がべっとり着いた。僕は朝まで寝られなかった(写真3)。

翌朝、子供達が僕を見つけて走り寄ってくる。昨日教えてやった、腰を落としてパチンと捻る真似を僕に見せる。そうさそうだと肩をポンポンと叩いてやる。こうしてみるとなかなか可愛い。先生の荷物は私が持つと、僕の荷物の取合いをする。ここでお別れである。僕はモロッコの古都であるフェズに向かった。

モロッコでの経験は、胡散臭い人々、危なげなホテル、異国情緒豊かなバザール、子供達との出会い、安ホテルでの南京虫体験と、他ではおそらく味わえないであろう、強烈な青春放浪記の中の思い出が蓄えられたのであった。

(京都祇園町 町内会長)

公益財団法人 京都健康管理研究会

住所：〒604-8111 京都市中京区三条通高倉東入栴屋町57番地 京都三条ビル401A号

電話：075-746-2123（火・水・木・金の10～15時） FAX：075-746-2092

E-mail: info@kyoto-f.com <https://www.kyoto-f.com>（本誌バックナンバー掲載）

〈事業案内〉

1. 研究助成（難病臨床主体） 1件 100万円以内
 2. 海外留学助成 1件 120万円/年（2年間まで）
 3. 海外開催の国際学会等への参加費用等助成 1件 25万円以内
 4. 難病患者団体活動費用助成 1件 50万円まで
 5. 国内開催の学会等開催費用助成 1件 50万円以内：申請随時
 6. 医学・医療に関わる書籍の出版補助 1件 100万円以内：申請随時
 7. 市民健康講座：年2回開催予定
 8. 医療相談事業、医療教育講座事業
 9. 季刊誌「健康塾通信」：1月15日、4月15日、7月15日、10月15日発行
- * 1、2の2025年度公募期間は終了しました。
* 3、4の2025年度公募期間は終了しましたが、枠空きがあり追加で随時申請受付中です。
* 5、6の2025年度分は、随時申請受付中です。
* 3～6の助成金は、年度枠一杯になり次第、申請受付を終了します。
* 詳細はウェブサイトをご参照ください。

■事業報告等

2025年1月9日：難病団体活動費用助成選考委員会

2025年1月18日：研究・奨学助成選考委員会



■市民健康講座

みんなで学ぶ健康学 安心を処方する

～高齢者への治療薬を考える～

日時：2025年4月12日(土) 13:30～15:45（開場13:00）

司会：長井苑子 公益財団法人京都健康管理研究会理事長
一般財団法人大和松寿会中央診療所所長

講演：乾 賢一 京都大学名誉教授/京都薬科大学元学長

会場：TKP京都四条カンファレンスセンター

（京都市下京区立売中之町9 四条SETビル6階）

主催：よみうりカルチャー大阪

協賛：公益財団法人京都健康管理研究会

後援：読売新聞大阪本社



■ご寄付者ご芳名：当財団の主旨にご賛同頂き、ご寄付を頂いた方々のご芳名を報告いたします。

（令和6年12月1日から令和7年2月28日まで、口数毎の日付順掲載）

〈31口〉 田中史郎・文子様 〈5口〉 富岡洋海様 〈2口〉 平野洋一様（令和6年5月18日付）

〈1.5口〉 小川美代子様 〈1口〉 栗林治代様、渡邊裕子様

* 寄付金は医療関係の研究・人材育成及び難病団体活動に対する助成金の一部に活用させていただきます。
皆様のご協力をお願いします



健康塾通信をお読みいただける方は、「郵便番号、住所、氏名」をご記載のうえ、
財団 FAX 075-746-2092 あるいは E-mail: info@kyoto-f.com にてご連絡ください。

* 本誌のバックナンバーはウェブサイト (<https://www.kyoto-f.com>) をご覧ください。